

# 典型的貨幣造出論と貨幣の循環過程の分析

高橋泰藏

- 一 緒言
- 二 典型的貨幣の概念
- 三 典型的貨幣造出の規範としての「貨幣と商品との Parallelismus」の原則
- 四 商品手形の割引による貨幣の造出とその循環過程
- 五 典型的造出體系と通貨組織
- 六 典型的貨幣造出と資本形成過程
- 七 エルスタアの批判
- 八 典型的造出論に於ける「自然的價格形成」の前提
- 九 結言——經濟機構と典型的貨幣造出論

## 一 緒 言

ベンディクセンはその「貨幣の本質」を著はすに當つて「貨幣の經濟的理論の任務は貨幣の本質を其の經濟的職能によつて決定し、そこから貨幣造出の原則を導出することにある」と言ふ<sup>(1)</sup>。貨幣理論の任務に關する見解を明かにしてゐる。このことは從來屢々貨幣本質論と貨幣政策論とが無關係に考へられて來たことと照し合はせて極めて重要な提言と言はなければならないが、「貨幣の本質」の後半に於ける「典型的貨幣造出論」はその前半に於て説かれた貨幣本質觀から必然的に導き出されたものとして、彼自らの課した任務に對する解答をなすものであつた。

以上の如きベンディクセン自らの示した貨幣理論觀と貨幣學說の構成にも拘らず、從來その貨幣本質觀たる指圖證

説についての研究乃至批判は屢々試みられながら、その貨幣造出論については殆んど顧みられるところがなかつた。偶々外國文献の造出理論を取扱ふものも、極めて簡単な素描に止まるか、或は本質觀との關聯を著しく輕視するものであつた。このやうに典型的造出論の顧みられなかつた理由の一つは、恐らく典型的貨幣の具體的實現方法として提唱せられてゐるものが商品手形の割引であることのために、何等新しき提案でもなく、更めて問題とする必要のなき事柄と考へられたことに基くと思はれる。けれども商品手形の割引による通貨の造出が何故に合理論的なものであるか、或はそれによつて如何なる状態が齎らされるかについては、從來必ずしも理論的な説明と充分な理解とがあつたとは言ひ得ない。<sup>(2)</sup>ベンディクセンがその典型的貨幣造出論に於て試みようとしたものは正にこの點をその貨幣本質論から明かにすることにあつたのであつて、「商品手形を基礎とする銀行券の發行は既に數十年來有力に立證せられて來たところであつて、何人もこれを廢棄せんとしたものはなかつた。唯この方法を理論的に基礎づけることがこれまで缺けてゐた。従つてその廢棄若くは制限が問題なのではなくして、これを如何に説明するか<sup>(3)</sup>問題である」と言つてゐることもこの故に他ならない。その理由はともかく、從來典型的貨幣造出論の有つ内容と意味との看過せられつたことは否定し得ないところであつて、このことは指圖證說殊にベンディクセンの貨幣學說を取扱ふ上に適當な方法でないと言はなければならない。今その典型的造出論について考察を試みようとする理由の一つは嘗て指圖證說の貨幣理論の基礎についての解釋を試みた關係上、これによつて以上述べた如きベンディクセン自身の貨幣理論の構造と意圖とに沿はんがために他ならない。<sup>(4)</sup>

(1) Bendixen, F. Das Wesen des Geldes. 1907. 4. Aufl. 1926. S. 15.

(2) 尤も商品手形を基礎とする銀行券の發行の理想的なることは既にスキムスの「國富論」第二編第二章に説かれてゐるところであつて、ジンガアはこれを *Smithsche Norm* と呼んで居り (Singer, K., *Das Geld als Zeichen*, 1920, S. 109—11.)、*ヘレンス* は更にベンディクセンの商品手形の割引による貨幣造出の主張の基礎をなすところの後段に述ぶる如き貨幣造出と商品生産との平行の要求が既にスキムスに見出されることを指摘してゐる (Behrens, W. G., *Das Geldschöpfungsproblem*, 1928, S. 36.)。このスキムスの造出論がトゥーク *Tooke* に採入れられて「銀行主義」理論の基礎をなしたと見られる。

(c) Bendixen, a. a. O. S. 61.

(4) 拙稿「分配機構としての貨幣經濟觀」(東京商科大学研究年報經濟學研究6所載)

しかし尠くとも一般に甚だ看過せられて來たこの問題を敢て取上げようとする理由は、以上の如き單に學說解釋の首尾を一貫せしめんとする興味のみに出づるものではない。それは典型的造出論はその本來の趣旨から言つて貨幣造出の理想とする原則を説いたものではあるが、しかしその有つ意味は單にそのみには止まらないで、かゝる原則の根據を説明することの中に貨幣の循環過程の分析が極めて具體的に行はれてゐると考へられるからである。この規範的ものを求むることの中に現實の循環過程の分析が見られると言ふことは一見相反することのやうであるが、この原則の實現方法として提唱せられてゐるものが商品手形の割引であると言ふことは現實の貨幣造出の典型的なる過程を示すものとして首肯せられるところであり、またある意味に於てはそこに打建てられた原則が商品手形の割引を正當化するためであつたと言ひうるからである。それはともあれ、かゝる貨幣の循環過程を明かにせることは貨幣理論一般にとつて缺くべからざる出發點をなすのみならず、殊に最近の貨幣理論の性格を理解し、その基礎を明かならしめる上に極めて重要な準備を供するものと考へられるからである。

最近凡そ十年間に於ける貨幣理論の方向と内容とに於ける著しい變化については既に一般に注目せられてゐるところであるが、この新しき方向に於ける貨幣理論を特徴づけ、その支柱をなしてゐるものは、貨幣の循環過程の分析とこの循環を左右する要素としての金利殊にその自然利子概念を背景とする導入であると言ひうる。この二つの特徴は何れも従來の貨幣理論の中心理論であつたところの貨幣數量説に對する批判の積極的な表はれをなすものであると同時に、經濟理論からの遊離化的傾向をとつてゐた貨幣理論の經濟理論への結合の契機をなすものと見うるであらう。ウイクセルが貨幣數量を興へられたるものとして出發することに満足せずして、これを決定する要因として金利を取上げたことは既に數量説に對する重要な修正をなすものであるが、自然利子概念の採用によりてその正當なる取扱方向を示したことは單に貨幣理論に對して新なる方向を興へたのみでなく、従來その内面的構造の探究に止められてゐた自然利子概念の正當な活用の仕方を示したものであり、これによつて經濟理論と貨幣理論との結合の道の一つを暗示したものとして甚だ注目すべきものであらう。

これと同様なことは貨幣の循環過程の分析が重要視せられ始めたことについても言ひうる。貨幣數量説は貨幣が物との關係に於て個別的に自らの價值を直接に決定すべきものを失ふに及んで、貨幣の價值の決定理論として考へられたものであつて、尠くとも物價水準によつて考へらるゝものとしての貨幣價值決定理論としてはその存在理由を認められなければならないが、しかしそれと同時に貨幣をして物の世界の表面に浮び出でしめて、物の循環に對應する貨幣の循環を考ふべき餘地を失はしめたことは否定し難いところであらう。このことは假令貨幣總量の構成内容の分析が行はれる場合にも、常に國家貨幣と銀行貨幣、實體貨幣と預金通貨と言ふ如き貨幣形態による分析に終つてゐたこ

とからも明かなところである。

貨幣理論に於ける貨幣數量の分析がこのやうな仕方にて行はれてゐる限り、財貨的動態理論の成果と結合しうる望はなかつたと言はなければならぬが、財貨的理論の成果に對する反省は貨幣理論に對してその新しき方向への一つの重要な暗示を與へることとなつた。それは財貨的理論の内部に於ける經濟の循環乃至資本の蓄積過程の分析を基礎とする不均衡説の發展であつて、ここでは經濟世界が單に價値量の世界としてではなく、一定の秩序に於て序列的に配置せられる財貨の世界として考へることによつて、動態現象は經濟の循環の仕方の變化として考へられたのであつた。財貨的理論に於けるこのやうな發展の結果と結びつくためには貨幣數量の内容の分析もこれに照應しなければならぬのであつて、貨幣がその作用場面に從つて分析せられ始めたことはこの要求に應じたものと言ふことが出来る。<sup>(1)</sup>かゝる方向の具體的な現はれとして見られるものはケインズの「貨幣論」並にハイエクの「價格と生産」に於ける貯蓄と投資との關係を貨幣的動態の原因として重視する見方であつて、それはこの貯蓄と投資とが貨幣の流れに於ける重要な通路であり、その循環の變化を司る關門であると考へられたからに他ならない。しかしかゝる貨幣をその作用場面に從つて觀察する方向と數量説との相異は、外形的には數量説が一般物價水準の變動の説明を直接の目的とするに對して、前者がむしろ物價水準を生産財價格水準と消費財價格水準とに、或は更に個々の價格にまで分解して、それら相互の關係の變動に動態理論への手懸りを求めんとしたことに見られるであらう。

以上述べた如く最近の貨幣理論の基礎をなすものゝ一つは貨幣の循環過程の分析への配慮に見られるのであつて、このことは財貨的理論の發展に照應し、これと結合する契機をなす點から言つても貨幣理論の進むべき新しき軌道を

示すものを言ひうるであらうが、しかし現になされつゝある分析の仕方は先づ貨幣の全循環を描くと云ふ理論的要求より見て果して充分なものであるかについては疑なきを得ない。蓋しそこに取上げられてゐる貯蓄——投資なる貨幣の通路は動態過程の理解の上には重要な通路ではあるが、貨幣の循環過程の基本的なる部分たる企業間に於ける財貨の流通を媒介する貨幣の循環は考察の外に置かれてゐるからである。循環のこの部分は所謂循環と言ふ點から見れば極めて特徴的なる経過を以て行はれてゐるのであつて、假令動態過程については本質的なる影響を有たぬものであり、一旦明かにせられたる上は省きうる部分であるにしても、貨幣理論の出發點として、またその考へらるゝ場面を明かにする上から言つても先づ解明せられなくてはならぬ部分だからである。典型的造出論の取扱ふところは正にこの部分に相當するものであつて、それは他面に於て貯蓄——投資の過程としての資本形成過程を除外してゐる點に於て全循環過程の分析としては甚だ不充分なることを免れないが、しかしそれは言はゞ舞臺上の演技の進行に對して舞臺裏の作業を物語るものであつて、この部分の循環を明かにすることは貨幣乃至金融現象に對する吾々の知識を着實なものとする上に缺き得ない準備と言はなければならぬ。

以上の如く貨幣の循環過程の分析は經濟現象の貨幣的機構を明かならしむるための基礎的準備として不可欠なものと考へられるのであるが、唯かゝる貨幣の循環過程の分析は既に述べた如く經濟世界の財貨的な構造と結合せられるものでなくてはならないであらう。貨幣を以て指圖證と見、財貨の分配手段と見る指圖證説はその前提として經濟世界を構成する財貨を總括的に「社會的生産物」として見るものであるが、典型的貨幣造出論を貨幣の循環過程の分析として見るときは、かゝる「社會的生産物」としての財貨世界では必然的に一定の秩序を以つて配列せられた財貨世

界として考へられなければならないであらう。典型的造出論は事實財貨世界をこのやうな構造を有つものとして考ふるとき最もよく理解せられるものであると同時に、それを通して考へらるゝ貨幣の循環過程の分析は上述の如き要求に最もよく適合するものと言ひうるであらう。この意味に於て、以下述ぶるところは直接には典型的造出論の解釋を通しての貨幣の循環過程の分析を主たる目的とするものであるが、同時に財貨世界の構造を秩序的に觀ることを基礎とすることによつて貨幣の循環を單なる流通としてではなくして、財貨の價值的分解と照應せしめて理解せんとする一つの試みに他ならな<sup>(1)</sup>。

典型的造出論に對する興味は今一つの理由は、それを貫く貨幣の財貨世界への從屬性の思想を通して、現實の經濟機構とは異なる例へば計畫經濟の如きものに於ける貨幣の作用と、そこに於ける貨幣造出の原則への暗示とが見られる點にある。かゝる解釋は「貨幣の本質」全體を通じても、また典型的造出論に於ても豫想せられた適用の道ではないと言はなければならないであらうし、從つてこゝでは單にかゝる適用の視角を示すに止めなければならないが、今この點に觸れて置く理由はそれが現在の視角からするその新しき意味と、また新しき問題とを汲みとる一つの角度であると思はれるからである。

(1) 貨幣の循環過程の分析はこれまでとても試みられなかつたわけでは無い。例へばラーン Lahn, J. J. O., *Der Kreislauf des Geldes und Mechanismus des S채tellebens*. 1903. ノオスタアーキヤッチングス Foster & Catchings, *Money*. 1928. ローゲン Wagemann, E., *Einführung in die Konjunkturlehre*. 1929. Konjunkturlehre, 1928. 等にこれを見ることが出来る。唯それぞれが充分に利用せらるゝに至つてゐないことは、その分析の仕方が財貨の循環と結合せられるために適當でなかつたことゝ、貨幣

理論の主流がなほこの方面への關心を示してゐなかつたことによらう。典型的造出論が從來顧みられなかつたことにしてもこの後者の理由が考へられるであらう。

(2) この點については後段八の第二切の註(2)参照。

(3) この點については前掲拙稿「分配機構としての貨幣經濟觀」一六九—七〇頁参照。

(4) 山口教授の財貨の流動化乃至資金化による貨幣の供給並に還流過程の分析は商品手形の割引による貨幣の循環過程を明かにしたものであつて、貨幣の循環過程の最も基本的な分析として極めて重要なものである(山口茂「流通經濟の貨幣的機構」第四章十四、「物價とインフレーション」新經濟學全集第二〇卷所收、第一篇第一章)。以下に於ける貨幣の循環過程の分析はその内容に於て正にこれと共通するものであるが、本稿に於てはこれを典型的造出論の解釋を手懸りとして上述の如き財貨世界の秩序的構造と結合しうる形に於て理解することを主とした。財貨世界の秩序的構造付けについての考察はこれを別の機會にゆづらなければならぬが、こゝではその具體的内容を生産構造として理解することに止めて置く。

## 二 典型的貨幣の概念

ベンディクセンの典型的貨幣造出論がその貨幣本質論の必然的歸結として考へられたものであることは既に述べた如くであるが、それはまた人爲的制度としての貨幣制度觀に基くものであつた。即ち「貨幣の發生にして既に自然的なものにあらずして人間の業であるとするならば、貨幣制度の行政は如何に律せらるべきであるか」が問題とならなければならぬと考へ、この意味からして貨幣造出を「計畫的な人間の行動として理解し、科學的な規範の下に置くこと」が必要であると考へられたのであつた。この貨幣を人間の計畫的な產物と考へることによつて、貨幣造出の問題

も科學的に探究された規範の下に置かれなければならぬとしたことは、スミスによつて貨幣が自然的生成物と考へられ、自然的なるものとしての金屬貨幣制度に於て貨幣の造出が自動的に行はれると考へられたことに對して、貨幣造出の問題を全く新な光の下に照し出したものと言ひうるであらう。<sup>(3)</sup>而してこのやうに科學的に探究せられた貨幣造出の規範とは後述する如き「貨幣造出と商品生産との平行關係」の原則であり、彼の所謂「典型的貨幣造出」の規範に外ならない。クナップが貨幣の名目性を明かにしたことは、或る意味に於て貨幣の人為的生成物であることを明かにし、貨幣造出が計畫的な規範の下に置かるべきことを暗示したものと云ひうるが、しかし彼は「造出すべき貨幣の數量に關して國家の従ふべき法則について更に進んで研究する必要がある」と言ふ結論を得たに止まつて、積極的にこれを探究し展開するに至らなかつたのであつて、<sup>(4)</sup>ベンディクセンの造出理論は正にかゝる意圖に沿つて探究を進めた一つの結果であると言ふことが出来る。

(1) Bendixen, F., *Währungspolitik und Geldtheorie im Lichte des Weltkriegs*. 2. Aufl. 1919. S. 128.

(2) Bendixen, F., *Geld und Kapital*. 3. Aufl. S. 57.

(3) エルスタアはこの點について「この問題(貨幣造出の問題)については經濟學の教科書にも參考書にもこれを見出すことは出来ない。それはインディクセンによつて始めてその草案を得たのである」と言つてゐる(Elster, K., *Die Seele des Geldes*. [1920] 2. Aufl. 1923. S. 220.)。しかし既にスミスにこれと甚だ共通點の多い論述のあることは既に述べたところである。

(4) Knapp, G. F., *Staatliche Theorie des Geldes*. 1905. S. 281-2. この點はエルスタアも指摘してゐるといふべきである(Elster, Seele, a. a. O. S. 282.)

以上の如き意味を以て成立した典型的貨幣造出論の内容は然らば如何なるものであるか。それは彼の説明に従へば「現にあるところのものではなく、あるべきものとしての典型的貨幣 *Klassische Geld* を齎らすところの貨幣造出」である。<sup>(1)</sup>従つて造出理論の内容そのものに立入る前に先づ「典型的貨幣」なる言葉によつて彼が如何なるものを考へたかについて一應明かにして置かなければならない。この點に關する彼の説明はやがて典型的造出論の價格決定理論との關聯に於ける性格を明かにする上に甚だ重要な意味を有つことゝなるからである。

「典型的貨幣」とはこれを最も簡單に言ひ表はせば「價值不動の貨幣」と言ふことであるが、その意味は、これを貨幣の側について見れば價值の變動せざる貨幣であるが、同時にその反面に於ては價格に影響を及ぼさざる貨幣と言ふ意味に他ならない。従つてこの後の意味に於ては若し價值の變動のある場合に於ても、その原因が商品の側にあつて貨幣の側に求めらるべきでないやうな場合には、この場合に於ける貨幣は典型的貨幣と呼ばるべきである。<sup>(2)</sup>以上の説明からしても明かであるやうに「典型的貨幣」とは決して貨幣の種類を意味するものではなくして、その造出が經濟的に疑義なきやうな貨幣と言ふ意味であつて、言はゞ貨幣造出の状態に關して考へられるものである。<sup>(3)</sup>

「典型的貨幣」を「價值不動の貨幣」なる言葉を以て表はしたことについてベンディクセンはそれは人々がよりよく理解するやうに通俗の用語を使用したに過ぎないと述べてゐるのであるが、このことが却つて正當な理解を妨げる懼れのあつたとは彼自らも認めてゐるところであつて、かゝる貨幣造出はユートピアに過ぎないと言ふデールの批評に答へた論文の中で更めて説明を加へてゐるところからも明かである。即ちそれによれば、「價值不動の貨幣」は凡ゆる價格の平均を不變の高さに保つことを要求するものではない。若しかゝることを國家に對して要求するとすれ

ば、それは餘りに多くを國家に期待するものと言はなければならぬ。「價值不動の貨幣」によつて要求するところは貨幣が商品の價格に影響を及ぼさぬ如くに造出せられると言ふことであつて、それは「價格相互の關係の變動」も、「價格の平均の變動」も妨げるものではないと考へられてゐる。<sup>(4)</sup>

以上によつて略ぼ明かとなつた如く、ベンディクセンが「典型的貨幣」の内容として考へてゐるものは結局貨幣の側から商品價格に影響を及ぼさぬ如き貨幣の状態と言ふことであつて、その内部に於て商品の側に於ける原因からする價格相互の關係の變化も、また價格水準の變化も認められてゐるところからすれば、それは最近ハイエク等によりて考へられてゐるところの「中立貨幣」の權想と著しく相通するものがあると言ふべきであらう。しかし彼は「典型的貨幣」の以上の如き意味を更に「自然的な價格形成」<sup>(5)</sup>或は「正しき價格形成」<sup>(6)</sup>を妨げぬ如き貨幣として説明してゐるのであるが、このことゝ後に述ぶる如くその實現方法として商品手形の割引による造出を考ふるところからすれば、それは既に均衡的なる價格の成立を前提し、貨幣の造出は單にかゝる既に成立せる價格に適應して行はるべきものに過ぎぬと考へられてゐることが知られる。このやうに既に成立せる價格に應じて貨幣を造出することが甚だしく困難なことでないかと考へてゐることは既に述べたところから知られるところであつて、この點が所謂「銀行主義」の主張と著しく共通するところであり、<sup>(7)</sup>それが「銀行主義」の新版とさへ言はれる理由をなすものであるが、同時に價格の決定理論に對して如何なる關係に立つかの問題が更めて問はれなければならぬことを示すものである。

(1) Bendixen, Wesen, a. O. S. 15.

(2) Wesen, a. O. S. 15-6.

(3) エルスタアはヘンデイクセンの用ひた *Klassische* と言ふ言葉の意味について詳細な解説をなしてゐるが (Soale, a. a. O. S. 261)、結局これを「理論の要求を最もよく満たす」と言ふ意味であると説明してゐる。この點はそれがヘンデイクセンの貨幣本質觀から導き出されたものである點からも殆んど異論の餘地なきところであるが、彼は特にそれが一般に「古典的」と呼ばれる經濟學に基くものではなく、従つて何等の關係も存しないことを注意してゐる。しかしその内容に於てミスが商業手形の割引による銀行券の發行を極力推奨してゐることゝ偶々一致してゐることは既に述べたところである。唯こゝではこのやうな言葉の上から生ずべき誤解を避くるためと、その意味とに従つて典型的と言ふ言葉を使用することとした。

- (4) Bendixen, Geld u. Kapital, a. a. O. S. 100.
- (12) Bendixen, Geld u. Kapital, a. a. O. S. 74. Anm.
- (9) Bendixen, Geld u. Kapital, a. a. O. S. 101.
- (7) 例へば Kepper, G., Die Konjunkturlehren der Banking- und der Currenyschule, 1933, S. 34-41. 参照。

### 三 典型的貨幣造出の規範としての「貨幣と商品との Parallellismus」の原則

ヘンデイクセンの貨幣本質觀によれば貨幣は共同體に存在する財貨に對する「要求權」の具體化であるが、この要求權は社會成員の共同體に對する「給付」によつて獲得せられるのであつて、要求權の實行と共に消滅すべきものである。このことは別の言葉を以てすれば、「給付」と「反對給付」との間に於ける間隔をつなぐものと言ひうるものであつて、貨幣が生産と消費とを結合するものと考へられたのはこの故に他ならない。「貨幣造出と商品生産との平

「行關係」なる原則は以上の如き貨幣本質觀を基礎として、貨幣造出に關する規範として導き出されたものであるが、同時にこれによつて以上の如き抽象的な形に於て述べられた貨幣經濟的流通を具體的にまた理論的に描くものとして見らるべきものである。

「貨幣造出と商品生産との平行關係」の原則はこれを一般的に言へば貨幣は商品の生産と共に造出せられ、その消費と共に消滅すべしと言ふことであつて、ベンディクセン自身の言葉を以てすれば「貨幣の造出は人々がその給付に對して貨幣を獲得するやうに行はなければならない」、一層具體的に言へば「唯販賣せられた商品のみが貨幣造出の基礎となりうる」のであり、また「貨幣はこの創出に與つた財の消費と共に消滅するものでなくてはならぬ」と言ふことである。<sup>(2)</sup>この規定の仕方は單に貨幣の發生のみを規定するものではなく、更に、その消滅をも規定するものであつて、この發生と消滅とを一貫して商品の生産と消費とに平行する如き貨幣造出が要求せられてゐることによつて、既に述べた如き意味に於ける典型的貨幣の造出が行はれると考へられたものである。即ちこの「平行關係」の原則を満たす貨幣の造出は、この原則の内容よりも明かなる如く、言はば、貨幣の財貨への從屬的性質を満足するものであつて、これによつて貨幣の側から財貨の價格に影響を及ぼさぬ如き状態に於ける貨幣としての典型的貨幣が期待せられたわけである。

然らばかゝる「平行關係」なるものゝ具體的内容は如何なるものであるか。こゝにその具體的内容を明かにすることとは同時に貨幣の循環過程を明かにすることゝなる意味に於て、また貨幣なる概念の具體的妥當範圍を示す意味に於て甚だ重要な事柄でなくてはならないが、この問題は當然貨幣の造出がそれを基礎として行はるべき「商品」乃至

「給付」の具體的意味と關聯するものであり、また貨幣がそれと共に消滅すべき「消費」なるものゝ意味によつて明かにせらるべき筈のものであらう。

「消費」の意味については、ベンディクセンはそれが貨幣の妥當範圍と從つて「平行關係」の意味を明かにする上に重要な概念であるところから特に説明を加へてゐるのであるが、<sup>(3)</sup>それによれば消費とは財貨が「商品流通から去つて私的使用に入る」と言ふことであつて、このことは一見極めて當然のことであり、不必要な説明の如くであるが、商品の生産及び消費と共に發生消滅すべき貨幣の運命を明かにするものとして重要な意味を有つものと言ひうる。しかしこの説明は説明そのものとしてはかゝる「消費」しうる財 *Konsumtibile Güter* の具體的内容が所謂消費財のみに限られるか或は生産財をも含むものであるかについてむしろ解釋の餘地を残すものとも見られるが、後にこれと同じ意味に於て「消費財」*Konsumgüter* 或は「生活資料」*Unterhaltsmittel, Lebensmittel*等の言葉の使用せられてゐるところから見て、所謂消費財が意味せられ、從つて「消費」は消費財の商品流通より去ることが意味せられてゐると見られる。

貨幣の本質に關してそれが消費財に對する要求權を表はすものとして考へられてゐることは、後にベンディクセン自身が積極的に「貨幣はその經濟的本質よりして消費財に對する指圖證であつて、資本財に對するものではない」と述べてゐることから明かなところであり、貨幣の消滅についてもかゝる消費財の消費と共に行はれると考へられたと見らるべきことは上に述べた如くであるが、しかしその發生についてはかゝる消費財の生産と共に造出せらるべしとは考へられてゐない。從つてかゝる消費財に對する要求權を表はし、その消費と共に消滅すべき貨幣が如何なる根據

と経過とによつて發生するかが更めて問題とならなければならぬ。蓋し貨幣が消費財に對する指圖證であると言ふことは結果としての貨幣と消費財との對應關係を示すものであつて、貨幣の發生と消滅との間に於ける「平行關係」の内容を示すものではないからである。

貨幣が如何なる根據によつて發生するかの問題は、言ひ換ふれば要求權としての貨幣の獲得せられる根據をなす「給付」とは具體的には如何なるものであるかの問題に他ならない。蓋し「平行關係」に於ける貨幣造出の基礎たる「商品」の生産は「給付」によりて實現せられるものであつて、既に述べた如く「平行關係」の内容としての貨幣の造出が「給付」に對して貨幣が獲得せられるやうに行はれると言ふことが、具體的には販賣せられた商品を基礎として貨幣造出が行はれると言ふことを以て考へられたこともこの理由によるものであつた。かゝる「給付」が直接に「消費財」の生産のみに對して行はれたものであるとは考へられてゐないが<sup>(5)</sup>かく考へることの無意味なることは殆んど議論の餘地のないところであらう——しかし、この「給付」の總計が結局に於て消費財の價値の總計と一致すべきものと考へられてゐたことは明かである。蓋しこの場合に於ける「給付」は結局に於て「消費財」に實現する如き財貨の生産に對して行はれたものを含むものと考へられるべきであるが、それによつて附加へられる財貨價値の増加分の總計が一方結局に於て「消費財」の價値を構成すると同時に、他方この消費財に對する要求權としての貨幣の發生基礎をなすと考へられるときは、この「給付」を基礎とする要求權と消費財とが、相對應する關係に置かれるからである。上に述べた如く彼が貨幣はその本質よりして消費財に對する指圖證であると考へたことはこの理由によるものと解せられる。而してかゝる「給付」に基づく貨幣は所謂所得を構成するものに他ならぬのであつて、彼は、寫眞寫

「貨幣と消費財との關係」なる關係を考へてゐたものと言ふことが出来る。しかし貨幣の造出に關する原則としての「平行關係」はかゝる總括的なる貨幣と消費財との對應關係としてではなくして、商品生産と貨幣造出との間に於ける個別的なる對應關係として考へらるべきであつて、この意味に於ける商品生産とは、價值量として結局に於て消費財價值に實現すべき生産過程に於ける凡ての財貨價值の増加分として、從つて貨幣獲得の根據となるべき「給付」とはかゝる財貨價值の増加分を齎らすべき給付として解せられ、從つて「貨幣造出と商品生産との平行關係」はかゝる財貨價值増加の各々と貨幣造出との平行關係として考へらるべきであらう。彼が後の論文に於て「商品の増加と平行して」と言つてゐることからもこの意味に解せられる。<sup>(6)</sup>

このやうに「貨幣と商品との平行關係」は貨幣の發生過程に即して見れば「給付」の各々と貨幣との平行關係或は給付による商品増加の各々と貨幣との平行關係として考へらるゝものであるが、これを貨幣の消滅について見ればその本質よりして消費財の購買による要求權の實行と共に消滅する關係として考へられるのであつて、この意味から「平行關係」の内容として單に貨幣の發生の根據乃至範圍を總括的に考ふる場合には、給付の綜合としての所得たる貨幣と要求權の對象としての消費財との對應關係が考へられるわけである。

(1) この表現の仕方はエルスタアに負ふものであるが (Elster, Seale, S. 264) インデイクセン自身も屢々「平行關係 Parallelismus」なる言葉を用ひてゐる (Bendixen, Wesen, a. a. O. S. 30, Geld u. Kapital, a. a. O. S. 51. 53.)

(2) Bendixen, Wesen, a. a. O. S. 26-7.

(3) Bendixen, Wesen, a. a. O. S. 20. 貨幣がそれと共に流通から去る原因をなすところの「消費」の意味についてはインデイ

クセンは殊更に説明をしてゐるのであるが、その趣旨は國民經濟的意味に於て、換言すれば流通過程の角度から見ると言ふことに他ならない。かゝる意味から要求權の對象としての「消費しうる財」はなほ流通過程にある消費財であつて、正確には「賣に熟したる消費しうる生産物」と呼んでゐる (Wesen. a. a. O. S. 21.)。

(4) Bendixen, Geld u. Kapital. a. a. O. S. 61. この點についてヘルスタアは貨幣を消費財のみに對する要求權と解することは貨幣概念の具體的妥當範圍を餘りに狭く解するものであり、これを「層廣く生産財並に勤勞給付をも含む意味に於ける「社會的生産物」として解すべきであるとする。(Eisler, Soziale. a. a. O. S. 98.)。この問題は「平行關係」の内容とも關聯するものであつて、後段に更めて述べることにする。

(5) Bendixen, Geld u. Kapital. a. a. O. S. 70.

(6) Bendixen, Geld u. Kapital. a. a. O. S. 51.

#### 四 商品手形の割引による貨幣の造出とその循環過程

「貨幣と商品との平行關係」は貨幣を以て消費財に對する要求權と見る立場を貫くときは理論的には凡そ以上の如く解せられるのであつて、要求權たる貨幣の發生の根據並に範圍を示すところの「給付」の總計は結局に於て社會全體の所得を構成する基礎をなすものとなる。然るにかゝる「平行關係」の要求を充たす貨幣造出の實際的方法としては商品手形の割引による造出が考へられてゐるのであつて、即ち「かゝる貨幣は實在する。それは幻想の世界にのみ存在するものではなくして現に見ることの出来るものであつて、即ち引受けられたる商品手形に基礎を置く帝國銀行券がこれである」と考へられてゐる。(1)

つて充たされるか、或は商品手形の割引による貨幣造出が如何にしてこの理論的要求に合致しうるか、明かにせられなければならないであらう。このためには商品手形の割引によつて造出せらるゝ貨幣の辿る経過が明かにせられなければならないが、先づ商品手形の割引によつて造出せらるべしと考へらる根據を顧みて置く必要があるであらう。

貨幣の造出が商品に對して行はれると言ふことについては、貨幣造出の根據となるべき「給付」が商品に直接具體化せられ、この商品が給付者の所有に屬する場合には、この商品に對する貨幣造出は直ちに「給付」に對して行はれることとなつて問題は存しないが、この「給付」が商品の一部分たる價值増加分として實現する場合には、その増加に對する貨幣造出は商品の全價值から分離して行ひ得ないのであつて、この場合には商品に對する造出を通して行はれると言ふ方法がとられる。即ち「人的勤勞給付若くは企業經營に於ける補助的給付については、給付者はその勤勞の受領者に依存する」<sup>(2)</sup>のであつて、この場合に於ても貨幣造出は商品に對して行はれることによつて、「給付」に對して行ふと言ふ要求を満足することが出来るわけである。唯かゝる「給付」なり「商品」なりが眞實に貨幣造出の基礎となりうるためには、それらが社會によりて受取られたことが必要であつて、この社會によつて受取られたことを證明するものは即ち商品手形の引受に他ならない。かくして既に述べた「唯販賣せられた商品のみが貨幣造出の基礎となりうる」と言ふ原則が立てられたのであり、商品手形の割引によりてのみ造出せらるべしと考へられたのであつた。

以上の如き根據から商品手形の割引によつて造出せらるゝ貨幣は然らば如何なる経過を辿るであらうか。商品の生産者はその商品が賣られると同時に引續き生産を續行する資金を得るためにその買手に對して手形の引受を求め、こ

の引受けられた手形を以て銀行に就て割引を求めて貨幣を獲得することが出来る。この場合は即ち商品手形を基礎として販賣せられた商品に對して貨幣の造出が行はれたわけであるが、かくして造出せられた貨幣はこの生産者が引續き生産を行ふに必要な原料品の買入れ、勞賃の支拂等に使用せられる。而してこの貨幣額は手形満期の到著と共に商品の買手たる手形の引受人によつて支拂はれて銀行に還流する。この場合に於ける手形引受人の支拂は、その商品の販賣と共に前の場合と同様にして手形の割引によりて得られた貨幣を以て行はれるのであつて、このことは前の賣手の場合に於ても同様であると言ひうる。即ちその生産者は既に自己の生産に必要な商品の買入れに當つて手形の引受をなし、銀行に對して債務を負つてゐるわけであつて、その商品の販賣と従つて手形の割引により得られた貨幣はこの債務の支拂に使用せられることとなるであらう。かくして凡ての生産者並に商人が手形の發行によつて商品を販賣し、手形の引受によりて商品を購買するときは手形の割引によりて造出せらるゝ貨幣は一定の期間を置いて規則的に銀行に還流することとなる。この期間は商品が再び商品として市場に出るまでの間の生産期間に當るわけであるが、これを相隔てた生産者間に於ける商品の流通過程と見るならば、貨幣は商品の販賣と共に造出せられ、その購買と共に流通から去つて銀行に還流することとなるのであつて、所謂「平行關係」はこの意味に於ても考へられることとなる。唯この場合に於ては貨幣は商品生産の各々と共に、或は事實上は商品販賣の各々と共に造出せられるのであつて、既に述べた如き結局に於て所得の源泉となるが如き「給付」に對して造出せられ、消費財の購入と共に消滅する意味に於ける「平行關係」とはその範圍に於て異なる内容を有つこととなるであらう。従つてこゝにかゝる商品手形の割引による貨幣の造出と消滅とが嘗て考へられた「平行關係」の原則と如何なる關係に立つか、或はこの事實が如何にし

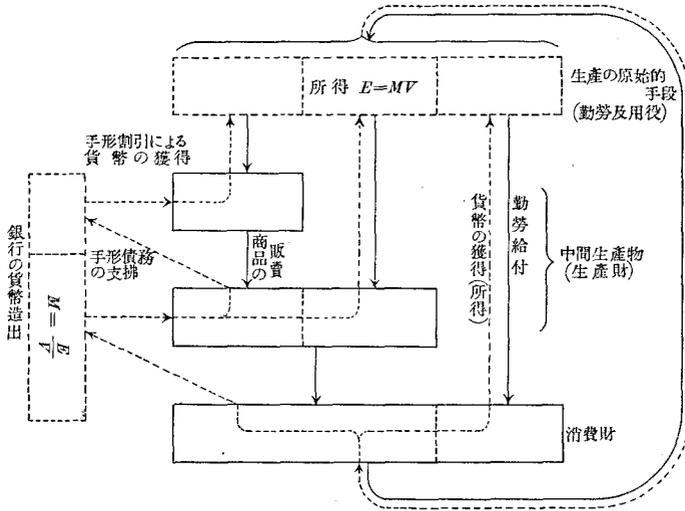
て理論的要求と合致する如く説明せられるかが更めて問はなければならないであらう。

(1) Bandixen, Wesen. a. a. O. S. 27.

(2) Bandixen, Wesen. a. a. O. S. 26.

商品手形の割引による貨幣の造出が、「給付」と共に造出せられ、「反對給付の請求」と共に消滅する意味に於ける「平行關係」と異なる内容を有つのは、取引の凡てに對して貨幣の造出が行はれると言ふことであつて、これを一定期間に於ける總量として見れば個別的取引の總計なる意味に於てフィッシアの交換方程式  $MV = p^1q^1 + p^2q^2 + p^3q^3 + \dots + p^nq^n$  に於ける  $MV$  に相當するものである。換言すれば生産者間或は商人間に於ける凡ゆる商品の流通に對して貨幣の造出が行はれ、この部分については常に重複して造出が行はれると言ふことに他ならない。しかしかゝる商品の流通に應じて造出せらるゝ貨幣については、同時に返済のために銀行に還流することによりて、その中に常に相殺的な部分が存在するであらう。即ち既に述べた如く各生産者並に商人に對して手形割引によりて造出せらるゝ貨幣の一部は一期間前の商品の購入によりて發生した手形債務の支拂に用ひられるのであるが、同時にこれと並行して同様な方法によりて造出せらるゝ貨幣に對して相殺的な作用を有つことゝなるからである。唯このやうに同時に造出せらるゝ貨幣を相隣る關係に於て造出と還流との關係として見るときは、この相殺的部分の他に生産要素によりて新に附加へらるゝ商品價値の増加に相當する部分は直接に銀行に還流せずして所得として支拂はれるのであつて、かゝる造出と還流との差額の合計は即ち社會全體の所得を構成するわけである。然るに以上の如き中間に於ける貨幣造出はこれに續く生産者乃至商人の手形割引による債務の返済によりて銀行に還流して相殺せられるのであるが、最終の過

程に於ける消費財の生産者或は商人に賣られた商品に對して造出せられた貨幣は、同様な方法によりて銀行に還流せ



すして、唯消費財の最終消費者に對する販賣によりて銀行に還流するのであつて、前述の造出と還流との差額として成立する所得が正にこの還流貨幣を構成するわけである。

今以上の如き商品手形の割引による貨幣造出とその還流過程とを試みに圖解すれば上の如くに表はしうるであらう。

(註) 此圖解はハイエクの生産構造の圖式の援用によるものである。それは既に述べた如く財貨世界を循環的秩序にあるものと見る場合に典型的造出論の構想が最もよく理解せられ、この場合この秩序を生産構造として理解することが最も適當と考へられるからである。

以上の如き商品手形の割引による貨幣の造出と還流との過程の分析によつて、吾々はその中に貨幣の流れに於ける二つの部分を見ることが出来るであらう。一つは商品の販賣と共に造出せられ、一定期間を経て返済によつて還流し、これを一定時期について見ればこれと並行して造出せらるゝ貨幣による支拂に

よつて還流して相殺せらるゝ部分であり、他はかゝる造出と還流との差額として所得を構成し、消費財の購入により

て銀行に還流する流れであつて、従つてこれを全體として見るときは、全造出額中の生産者並に商人間に於ける商品の流通に相當する部分は常に還流によつて相殺せられ、この還流差額のみが所得を構成して消費財の購入と言ふ過程を通つて銀行に還流することとなる。このやうな貨幣の流れに於ける二つの區別は、後述する如くこれを貨幣の形式として見れば大略前者は預金通貨（帳簿貨幣）の形を以て、後者は銀行券（實體貨幣）を以て行はれるものと言ひうるのであつて、更に  $MV + MV' = PT$  なる關係について見れば、 $MV'$  と  $MV$  との關係に當ると見うるであらう。而してこの所得を構成する部分は各生産又は流通（配給）の間に於ける「給付」に對して支拂はれるものに他ならないのであつて、かくして獲得せられた貨幣は前述の如く消費財と相對應することとなるのであつて、これによつて正に「要求權」たる實質を獲得すると言ふことが出来るであらう。かくして以上の如き商品手形の割引による貨幣の造出は結局に於てその内容に於ては既に述べた如き「給付」に對して造出せられ、「反對給付の請求」によりて消滅する關係として考へられた「平行關係」を維持するものであつて、何等これを破るものではないと考へられるわけである。唯實際に於てこの「給付」に對する部分のみが商品の全體に對する造出と切離して行はれ得ないために、これに對する商品手形の割引を通して間接に行はれ、その還流との差額として造出せられると言ひうるが、同時にこのことは實際に於て所得を構成する貨幣の成立過程を示すものとして重要なものと言はなければならないであらう。

以上述べた如く商品手形の割引による貨幣の造出と還流との差額として成立する所得は結局に於て銀行に還流するものであるが、しかしそれは發生より還流に至る期間に於て流通に残留し、或る大きさを保つものである。固より一

方にかゝる所得を構成する貨幣の發生があると同時に、他方常にこれと並行して消費財の購入による銀行への還流があるわけであるが、この二つの流れの差額は通常銀行券の發行額に見る如き大きさを保つものである。それは凡そ生産が營まれるためにはその生産の完成せらるゝ迄の期間に亙つて生産に参加する人々の生活を維持するところの資金が豫め用意せられてゐなければならぬからであつて、この資金は生産の完成したる後に、商品の販賣によりて得られた貨幣の内、原料品其の他の購入によりて生じた手形債務の支拂に當てられた残額によつて置換へられるものである。従つて貨幣の還流差額は常にかゝる資金の置換をなしてゐるものと見るのであつて、ベンディクセンが「經營資本の置換」と呼んでゐるものは正にこの過程を指すものと言ひうる<sup>(1)</sup>。而してこのやうに既に商品手形の割引による造出と還流との差額の發生以前に存在する貨幣は一定期間について見れば所得を構成するものであるが、これを一時點について見れば  $E = MV$  なる關係に於ける  $M$  に相當するものであつて、それは前述の如く所謂行券の發行額を構成するものに他ならない。勿論銀行券の發行額そのものは後に述べる如く單にかゝる造出のみから成立するものではないが、その内容は常に一方銀行より流出しつゝあると同時に、他方銀行に還流しつゝある貨幣の流れの一時點に於ける大きさとして構成せられてゐるものであつて、その背後には上述の如き規模を有つ貨幣の循環があると言はなければならぬ。従つて銀行券の發行が所謂貨幣の流通量として考へらるべきものであり、その増減が通貨政策の目標として取上げられうるのはその背後に於ける全貨幣循環の規模を反映する指標として考へられるからでなくてはならぬ。

(1) Bendixen, *Wesen*. a. a. O. S. 24.

以上によつて吾々は商品手形の割引による造出並に還流としての貨幣の循環が以上の如く行はれる限り、所謂「平行關係」の原則がこれによつて維持せられると考へうる理由を見たのであるが、尙その實際上の適用について二つの點を補足的に述べて置く必要があるであらう。即ち一つは商人の發行したる商品手形の割引もまた典型的造出の基礎たりうると言ふことであり、今一つは商品手形の割引によりて造出せらるゝ貨幣の具體的形式として銀行券と帳簿貨幣との二種が區別せられてゐると言ふことである。

商品手形の割引による貨幣造出についての以上の如き分析は生産に關はらしめて見たものであるが、このことは單に生産者と生産者との間に於ける商品の流通についてのみでなく、更に生産者と商人乃至商人と商人との間に於ける流通にも適用せられうるものである。<sup>(1)</sup>「平行關係」の原則は一應商品の生産と共に貨幣が造出せられると言ふことであるが、事實上は商品の販賣と共に造出せられると言ふことであつたことから見ても當然行はるべき擴張であるが、更に嚴密な意味に於ても「平行關係」の内容としての「給付」と貨幣造出との平行關係と言ふ點から見ても、既に述べた如き相連續する流通に於ける商品に對する造出と還流との相殺の差額たる部分は、商人の所得を構成するものであり、その「給付」に對して造出せらるゝものとなるのであつて、この場合も亦「平行關係」の原則の外に出るものではないと言ひうるであらう。

商品手形の割引による造出は、具體的には銀行券と振替貨幣 *Clearing Gold* との二つの形式を以て行はれるのであつて、<sup>(2)</sup>このことは一面技術的な問題として貨幣造出については帝國銀行（發券銀行）と私的銀行（市中銀行）とが並存的な立場にあることを示すものであるが、同時に、他面一國の通貨の具體的構成とその循環との關係を示すものであ

る。即ち商品手形の割引による貨幣の造出は、帝國銀行のみではなくして市中銀行も亦これを行ふものであつて、その割引と同時にその額だけを手形持參者たる生産者又は商人の勘定に記入し、生産者又は商人はこれによりて小切手又は振替を以て支拂をなしうることとなる。即ちこゝに振替貨幣の造出が行はれるのであるが、この一部は生産者又は商人の既に引受たる手形債務の満期と共にその支拂に使用せられ、一部は勞賃その他の支拂のために銀行券或は小切手を以て引出され、既に述べた如き循環が行はれるわけである。従つてこゝに銀行券と振替貨幣との二種の貨幣が商品手形の割引によりて造出せられることとなるわけであるが、その合計は手形額によりて決定せられ、一方が増加すれば他方が減少する關係にあるものであつて、この割合はその國の支拂上の習慣によるものであるが、大體に於て既に述べた如く所得として支拂はれるものは銀行券の形をとり、生産者又は商人間に於ける支拂は振替貨幣の形をとると言ひうるわけである。

以上の如き商品手形の割引による貨幣の循環過程の分析を通して、商品の生産と共に造出せられ、その消費と共に流通から去ると言ふ貨幣造出に於ける「平行關係」の原則は、具體的には商品の手形の割引によりて充たされ、その趣旨に反するものではないと考へられるのであつて、こゝに典型的貨幣造出の具體的方法として商品手形の割引による造出が推奨されたのであつた。而してそれは既に數十年來實際に採用せられて來て居り、特に歐洲大戰前に於ける獨立帝國銀行の守つたところの慣行を正當化する所以となるものであつたが、かゝる典型的造出に關する積極的の原則は、その反面に於て言はゞその消極的の原則として銀行は商品生産に基かざる貨幣は造出すべからず、これを具體的に言へば融通手形の割引による貨幣造出をなすべからずと考へられたのであつた。<sup>(3)</sup>

(1) スミスは前述の如き商業手形の割引による發行の相手方として常に「商人又は企業家」を考へて居り、また屢々單に商人を以て代表せしめてゐる (Wealth of Nations, Cannan's ed. 1925, Vol. I, p. 287)。それは生産者も亦流通過程に参加するものとして商人と考へらるる意味から考へられたものであることは言ふまでもない。

(2) Bendixen, Wesen. a. O. S. 30-1.

(3) Bendixen, Wesen. a. O. S. 30.

## 五 典型的造出體系と通貨組織

「貨幣と商品との平行關係」の原則を充たすところの典型型貨幣造出論の内容は以上を以て略ぼつきるのであるが、しかしそれが貨幣造出の凡てを説明するものでもなく、また通貨組織の全貌を示すものでもないことは言ふまでもない。「貨幣の本質」に於てはその本質論から必然的に導き出されるものとしての「平行關係」の原則を充たす如き典型的貨幣造出の解明に主點が置かれてゐるために、その全通貨組織における地位と全體の造出點系とは明かにせられないで終つてゐたのであつた。この點を補ふものとして後に書かれた「貨幣造出論に對する註釋」なる論文が見られるのであつて、これによつて略ぼベンディクセンが全通貨組織と造出體系とについて抱いてゐた考を窺ふことが出来る。勿論この「註釋」に於ても可成り未整理のまゝに残されてゐるところがあるのであるが、しかし從來かゝる通貨組織の理論的解明が餘り試みられてゐなかつたことから見て、また殊にそれが造出體系と關聯せしめて考へられてゐる意味に於て、この問題に對する大膽なる一つの試みとして注目せらるべきものと言ひうるであらう。

上に述べ來つた典型的貨幣造出の原則は、商品の生産と共に貨幣が造出せられると言ふことであつたが、しかし凡ての貨幣が商品の生産と平行してのみ造出せらるべしと考へられたのではなかつた。それは貨幣造出が購買力を作出す如きものである場合には、かゝる造出は價格に影響を及ぼすが故に、科學的に基礎づけられた法則の下に置かるべしと考へられたのであつて、典型的造出論はかゝる價格に影響する如き購買力の造出に關して、それが價格に影響を及ぼさぬ如き造出の規範を論じたものに他ならなかつたからである。従つてその性質上價格に影響を及ぼさぬ如き貨幣の造出についてはこの原則は適用せられる必要のないものと考へられたのであつて、こゝにベンディクセンが價格に影響を及ぼす貨幣と影響を及ぼさぬ貨幣との區別を考へたことが知られる。<sup>(4)</sup>而してかゝる價格に影響を及ぼさぬ貨幣として彼の考へたものは手許準備金 *Kassenbestand* と四半期末決済資金 *Quartalssterminen* とである。手許準備金の存在は全體の國民經濟から見れば貨幣的流通の行はれるために缺き得ざる前提をなすものであり、また個々の私經濟から見れば購買力の豫備をなすものであり、常に出入する貨幣の外に、一定の水準を以て残存すべきものであるが、しかしこれは市場に出ることなく、従つて價格に影響を及ぼさざるものである。かゝる貨幣の額は一國の人口、富の程度によりて定まるものであつて、流通の圓滑に行はれるがために、典型的造出とは別に國家の造出を要するものである。<sup>(3)</sup>四半期末決済のための資金は資本の借換、利子、給料、賃借料の支拂等のために定期に起る貨幣需要であつて、數日の後に規則的に還流するものである。かゝる貨幣は價格に影響を及ぼすものではないが故に上述の原則に従ふことを要しないものと考へられる。<sup>(4)</sup>

(1) *Bemerkungen zur Geldschöpfungstheorie*. Jahrb. f. Nat. u. Stat. Augshert. 1919. 前掲 *Geld und Kapital*. 2. Aufl.

1920. 所收

(3) Bendixen, Geld u. Kapital. a. O. S. 58.

(c) Bendixen, Geld u. Kapital. a. O. S. 67-8.

(4) Bendixen, Geld u. Kapital. a. O. S. 52. u. 58.

以上の如く價格に影響を及ぼす貨幣と及ぼさぬ貨幣とに分つた後に、ヘンディクセンは更にこれとは別に造出の技術的種別として、固定的造出 *feste Schöpfung* と伸縮的造出 *elastische Schöpfung* とを區別する<sup>(1)</sup>。この固定的造出と伸縮的造出との一般的性格については特に説明せらるゝところがないが、その具體的内容として、固定的造出に屬するものとしては補助貨の造出、自由鑄造による造出及び外國手形（金に換へるために買入れられ、従つて再び賣出されぬところの）を基礎とする造出とが數へられ、伸縮的造出に屬するものに商品手形の割引による帝國銀行券の發行と私的銀行の振替貨幣の造出とが擧げられてゐる。以上の如き具體的内容から見るときは、伸縮的と言ふ意味はこれによつて造出せられた貨幣が規則的に造出源泉に還流すると言ふことであり、固定的とはこれに對して繼續的に流通に止まると言ふ意味に解せられる<sup>(2)</sup>。

従つて今こゝにその作用について分たれた貨幣の區別と、その造出方法について分たれた貨幣の區別とを對照して見るならばこゝに伸縮的造出と呼ばれるものが上に述べた如き典型的造出に當るものであり、それは購買力を形成し、従つて價格に影響を及ぼすものであるが故に、一定の規範の下に行はるべき造出を指すことは明かである。これに對して固定的に造出せられた貨幣はその大部分は前述の手許準備金を構成すると考へられてゐるのであつて、これに

いは別個の造出方法がとられると考へられてゐることは上述の如くである。従つて大體に於て一方に價格に影響を及ぼす貨幣の造出として商品手形の割引による伸縮的造出が考へられ、他方に於て價格に影響を及ぼさざる貨幣たる手許準備金の造出として補助貨、自由鑄造貨幣、外國手形を基礎とする貨幣等の固定的造出が考へられてゐたと見られる。

以上の關係の中前者については一應問題は存しないと言ひうるが、後者についてはその内面的關聯の何等述べられるところがなく、甚だ不明瞭なまゝに殘されてゐると言はなければならぬ。唯これを手許準備金の性質から見て、それは貯蓄せられた貨幣であるが、「利子を生まぬ」zinsloseものであつて、この點に於てはケインズの「一般理論」に所謂流動性選好によりて現金の形に於て保有せられる貨幣であり、且つ貨幣的流通の行はれるために不可欠な條件をなすところの常に流通に殘留すべき貨幣量と見ることが出来る。而してこれを固定的造出の内容をなすところの補助貨、自由鑄造貨幣、外國手形を基礎とする貨幣として見るときは、この後の二者は帝國銀行の地金及び外國手形の買入れによつて造出せられたものであつて、所謂正貨準備による發行に他ならない。既に述べた如く所得を構成する貨幣は手形割引による貨幣の造出と還流との差額として成立し、刻々に銀行より流出すると同時に還流して略ぼ一定の流通殘額を保つものであつて、この流通殘額は銀行券の發行額として見られるものである。固定的造出による貨幣は額としてはかゝる流通殘額としての手許準備金を構成するものと考へうるわけであるが、その内容は常に上の如き方法によりて置換へられるものと言ふことが出来るであらう。唯かゝる流通殘額は固定的造出による貨幣と必ずしも量的に一致するものではなく、また殊に定期的に變動することからしても、兩者の間には喰違ひがあると言はなければ

ばならない。この喰違ひの生ずる一般的原因としては典型的ならざる造出の如き所謂通貨の膨脹を惹き起す諸事情が考へられるであらうが、流通残額の定期的なる變動については前述の四半期末決済資金の造出上の性質が顧みられねばならぬであらう。

四半期末決済資金の性質についてはベンディクセン自身は價格に影響を及ぼさぬものであり、従つて典型的造出の原則の外に出るものと考へてゐるに過ぎないのであつて、その造出が固定的造出と伸縮的造出との何れに屬するかについては何等説明するところがない。典型的造出の外に出る點からすればそれは伸縮的造出に屬するものではないかの如くであるが、しかし規則的に還流して繼續的に流通に留まるものでない點からすれば固定的造出に屬すべきものでないことは明かであつて、この點からエルスタアはそれは自明的に伸縮的造出に屬するものであると解してゐる。<sup>(3)</sup>しかしながら四半期末の貨幣需要の中、資本の借換の如く單に置換に終るものは別として、利子、給料、賃借料の支拂等に使用せらるゝものは本來所得を構成するものであつて、既に商品手形の割引によりて造出せにれたるものが一時銀行に預入れられ、定期的な實體貨幣の形を以て拂出されるものであつて、銀行券の發行額の定期的増加するの如くなる理由によるものである。従つてそれは既に「平行關係」の原則に従ふ典型的造出の中に含まれてゐるものであつて、特に典型的造出と獨立な伸縮的造出として考へらるべきものではなく、またそれが所得を構成するものとしては、價格に影響すべきものであつて、この意味からしても典型的造出の範圍内に屬するものと解せらるべきであらう。それが價格に影響を及ぼさぬと考へられたことは、豫定せられた所得の範圍内に於て既に行はれた購買による負債の支拂に使用せられるに過ぎぬ點より考へたものと解せられる。従つてそれが實際上銀行に還流するのは消費財の

購入その他の支拂を通して行はれるものであつて、この過程が連続して行はれることによつて、銀行券の發行額は定期的に増加を除いては常に略ぼ一定の水準を保つこととなるわけである。

(1) Bendixen, Geld u. Kapital. a. a. O. S. 66.

(2) 上記解釋は *Handbuch der Geldlehre* (Ehster, Seel. a. a. O. S. 267.)

(3) Ehster, Seel. a. a. O. S. 267.

以上二節に互つて述べた商品手形の割引によつて造出せられる貨幣の循環過程はこれを要約すれば凡そ次の如くに言ひうるであらう。先づ商品手形の割引によりて造出せらるゝ貨幣は一定の期間を経て凡て銀行に還流するものであるが、この還流は次の如くに行はれる。即ちこれを割引せられた個々の手形について見れば、それは一定期間(例へば三ヶ月)後の手形満期の到達と共にその決済によりて銀行に還流するのであるが、この決済は中間の生産者並に商人に於てはその商品の販賣に對して振出されたる手形の割引によりて得た貨幣を以て行はれ、最終に於ける消費財の販賣者に於てはその商品の消費者への販賣代金の中から行はれる。しかしこれを一定時期について全體として見るときは一方に手形割引による造出が行はれると同時に、他方に満期決済による商品の購入代金に相當する部分の還流が行はれ、所得に相當する部分のみが差額として流通に残留することとなる。而してこの残留部分はこれに相當する消費財の購入によりて銀行に還流する額に置き換はり、更にこの残留額が次に消費財の購入によりて還流するときは、新に差額として残留するものによりて置換へられ、かくして流残額は常に略ぼ一定の水準を保つこととなるのであつて、この流通残額は一定期間の所得  $E = MV$  に於ける  $M$  に相當するものである。更にこれを全體の通貨組織の中

に於て見るときは、かゝる流通貨幣額が常に一定の水準を保つことは豫め經營資本としての貨幣が流通に投ぜられてゐることに基くものであり、更に略ぼ一定水準を保つ手許現金の合計に相當するものであつて、所謂銀行券の發行額に見ることの出来るものである。唯實際の支拂習慣として、所得を構成する貨幣が定期的に支拂はれるためにかゝる流通貨幣量たる銀行券の發行額に定期的な増減が見られるのであるが、かゝる實體貨幣の増減の反面に於て、これと逆の關係に於ける帳簿貨幣の増減が起るのであつて、この兩者の合計は全體としての貨幣造出によつて決定せられるわけである。

以上は言ふまでもなく凡ゆる商品流通が貨幣の典型的造出によつて媒介せられる場合の貨幣の循環過程を語るものであつて、かゝる場合に於ては凡ゆる商品の流通はこれに應じて造出せられる貨幣によりて媒介せられ、唯流通を圓滑ならしめる（販賣或は給付に先立つて購入し得る）ために豫め準備せられる手許準備金のみが流通に於ける貨幣として必要とせられるに止まるわけである。かゝる貨幣の造出と循環とを考ふことは貨幣の典型的なる循環を考ふものであつて、それが直ちに貨幣の造出並に循環の實際に合するものでないことは言ふまでもないところであるが、唯これを貨幣造出の理想を示すものとしての意味を別としても、かゝる典型的なる場合を描くことは、現實の循環過程の構造とその據るところの貨幣造出との關聯を計る基礎を示すものと見ることが出来るであらう。

## 六 典型的貨幣造出と資本形成過程

商品手形の割引による以上の如き貨幣の循環過程はその最も單純な場合であつて、言ひ換ふれば何等の貯蓄も行は

れず、所得はそのまゝ直ちに消費に支出せられると假定したる場合に外ならない。しかしながら實際に於てはその所得の中の幾許かは常に貯蓄せられ、投資せられるのであつて、こゝに貨幣の循環はその發生より消滅に至る過程の間に更に貯蓄——投資なる一つの通路を含むこととなる。この過程は所謂資本形成の過程をなすものであるが、それは前述の如き貨幣造出の原則に對して如何なる關係に立つものであらうか。ベンディクセンは「貨幣の造出は如何なる資本形成とも結合せられてはならない」と考へる。このことはしかし貨幣造出は資本形成に積極的に關與する如きものであつてはならぬと言ふ意味であつて、資本の形成は貨幣造出の關知せざる問題であると言ふことではない。言ひ換ふれば資本形成は以上の如き貨幣造出による循環過程の中に包含せらるべきものであり、その範圍内に限らるべしと考へられたのであつた。従つて典型的貨幣造出の原則はこれによつて資本形成に於ける原則を間接的に規定してゐるものと言ふことが出来るのであつて、これを具體的に言へば銀行の積極的活動としての信用業務は商品手形の割引による貨幣造出に限らるべきであつて、資本形成については單に媒介機關たるべしと言ふことである。

然らばこの場合に於ける貨幣の循環は如何なる過程をとり、如何に説明せらるべきこととなるか。この點に關するベンディクセン自身の説明は既に貨幣の指圖證としての本質を論じたる後に、この指圖證たる貨幣が直接に反對給付の請求のために使用せられずして「貯蓄」せらるゝに於ても、如何にして常に消費財に對する請求權としての役割を果すかを論じたるところに見ることが出来る。

既に述べた如く貨幣は「給付」に對して與へられるものであり、「消費しうる財」に對する要求權を代表するものであつて、貨幣がその本質に合致する如き方法によつて、即ち典型的造出の方法によつて造出せらるゝときは、かゝ

る要求權の具體化たる貨幣は「給付」の結果として成立したる「消費しうる財」を代表するものであり、兩者は正に相對應する關係に立つものである。然るに給付によりて獲得せられたる貨幣は凡て常に直接に「反對給付の請求」のために使用せられたるとは限らないのであつて、その一部は「貯蓄」せられる。この貯蓄せられたる貨幣はしかし常に貯蓄者の「給付」に對する對價として社會が彼に提供すべき消費財を代表するものであつて、従つてこの貯蓄に相對應するところの消費財が一應消費せられずして殘存すると見なければならぬ。しかし「給付」によりて獲得せられた貨幣と、給付の結果として成立したる消費財とは遂に出逢はなければならぬのであつて、従つて貯蓄せられたる貨幣が如何なる過程を辿るか、またそれによりて代表せられる消費財が如何なる貨幣により、また何人によつて購買せられるかが尋ねられなくてはならない。このことは言ひ換ふれば貯蓄せられた貨幣と結局に於て消費財を購ふ貨幣との間に存すべき關係と更にこれを連絡する過程とを明かにすることに他ならない。

貨幣の形に於ける貯蓄の行はれる反面に於て財貨の形に於ても貯蓄が行はれるのであつて、かゝる貯蓄せられ、流動化せられた財貨をベンディクセンは「流動資本」 *flüssige Kapital* と呼ぶ。従つてかゝる流動資本は貯蓄貨幣によりて代表せられる消費財から成るものであるが、これを代表する貯蓄貨幣は銀行の媒介によりて投資せられて固定資本に變じ、他方流動資本たる消費財はこの固定資本の生産に参加したる人々の手によりて消費せられて固定資本となる。この過程はベンディクセンの掲ぐる建築の行はるゝ場合の例を以てすれば次の如くである。即ち貯蓄せられた資金は銀行の媒介によりて建築に参加したる建築業者、煉瓦製造者、手工業者、勞働者等によりて受取られ、支出せられる。他方貯蓄者はその對價として完成したる財（建築物）の一部を所有することゝなるのであつて、それは通常

有價證券の形を以て獲得せられる。かくして生活資料は貯蓄によりて流動資本となり、更にその使用によりて固定資本となり、貯蓄せられた貨幣と生活資料とは抵當權と建築物とに變じたこととなる。<sup>(2)</sup>これによつて見ると、一方貯蓄貨幣は銀行を媒介として建築業者に貸付けられ、この建築業者の手を通して建築に参加したる人々に支拂はれ、その代表するところの貯蓄資本即ち消費せられざりし消費財を購ふこととなり、他方貯蓄せられた生活資料は貯蓄により流動資本となり、消費せられることによりて固定資本を成立せしめることとなる。しかしながらこの貯蓄貨幣と固定資本と、また流動資本と固定資本との關係は貯蓄貨幣の循環過程と固定資本の生産過程との結果に於ける對應關係を示すに過ぎないものであつて、かゝる關係の成立するに至る實際の過程を示すものではない。蓋し建築に必要な煉瓦その他の建築資材は貯蓄貨幣によりて購はれる以前に既に成立してゐるべきであり、その生産に要せられたる貨幣は別に供給せられてゐなければならぬからであり、更に一般にかゝる投資財の生産は貯蓄貨幣によりて行はれるのではないからである。或は更に屢々實際に見られる如く貯蓄貨幣の購ふものは建築資材や消費財ではなくして、既に完成せられたる建築物を代表する證券だからである。このことはベンディクセンも既に認めてゐるところであつて、「吾々の經驗によれば、貯蓄者の多くは家屋の完成したる後に證券を獲得するためにこの計畫に参加するのである。かくして家屋は彼等の貯蓄によりて建築せられたのではないと言はなければならぬ。」<sup>(3)</sup>と言つてゐる。従つて然らば如何なる貨幣を以て建てられるのであるかと言ふことが問題とならなければならぬわけである。

この問題はベンディクセンによれば前述の經營資本の生産過程に於ける役割を明かにすることによつて明かにせられる。即ち「經營資本は貯蓄せられた流動資本の先驅をなすものであつて、家屋を建築して貯蓄者の資本のために豫

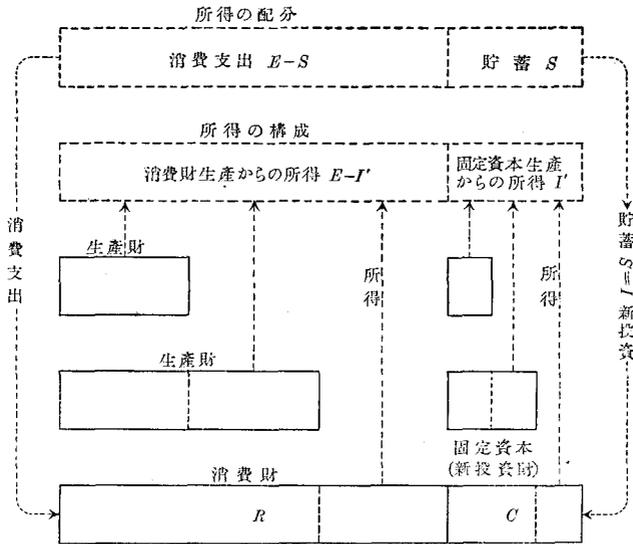
め場所を用意し、貯蓄者の貨幣が擔保(證券)としてその目的地に到達したる後に新たなる仕事に遣へるものである<sup>(4)</sup>。曩きに述べた貯蓄せられた貨幣によりて購はるべき固定資本を生産するものは即ちかゝる經營資本であつて、貯蓄貨幣はかくして生産せられたる固定資本を購ふものに他ならない。かゝる經營資本が商品手形の割引によりて置換へられて絶えず循環するものであることは既に述べた如くであるが、それは同時に生産参加者の所得として支拂はれるものである。而して既に貯蓄によりてその消費が延期せられた消費財を購ふものは、かゝる固定資本の成立過程に於て生じた所得に他ならない。従つて貯蓄によりて生じた貯蓄資本(消費財)がその販路を見出し、また貯蓄貨幣がその使途を見出すためには、常にこれと並行して既に固定資本たるべきものゝ生産が行はれて、一方その生産より所得が成立すると同時に、他方に貯蓄貨幣によりて購はるべき固定資本の生産が行はれてゐなければならぬのであつて、これによつて貯蓄貨幣と固定資本と、並に貯蓄資本(消費財)と固定資本の生産より生ずる所得との間に夫々對應關係が見られるわけである。而してかゝる對應關係に於ける一方の流れをなすところの固定資本の生産とそれからの所得とを連絡する過程に於ても既に述べた如き商品手形の割引による貨幣の造出が行はれ、これによりて固定資本の完成までの商品の流通と所得の成立とが行はれることは言ふまでもないところであらう。商品手形の割引による貨幣造出について試みた既述の如き解釋は實はこの場合に對するベンディクセンの説明から逆に敷衍することによつて得られたものに他ならぬ。

(1) Bendixen, Wesen. a. a. O. S. 29.

(2) Bendixen, Wesen. a. a. O. S. 22.

(c) Bendixen, Wesen. a. a. O. S. 23.

(4) Bendixen, Wesen. a. a. O. S. 24.



以上の如く見來るときは吾々は生産と貨幣の循環との總過程を、貯蓄の行はれざる最も單純なる場合に於ても見らるゝ如き基本的部分と、貯蓄の行はるゝ場合にこれによりて購はるべき固定資本の生産並にこれに相應する所得の生ずる部分との二つの部分の複合として見ることが出来るのであつて、従つてこの場合に於ては一方生産は消費財の生産せらるゝ全過程と新たな固定資本の生産過程とより成り、他方所得はこれら消費財の生産過程並に新固定資本の生産過程の各々から生ずる所得の合計より成ることゝなるわけである。

この關係を前掲の圖解と同様な方法により試みにケインズの「貨幣論」に於ける諸符號を當嵌めて見れば次の如く示すことが出来るであらう。

ケインズの「貨幣論」に於ける「新投資の生産費」(I')に當るものであり、固定資本はこの新投資財(c)に當りその價

値は新投資によりて實現せられる價值(Ⅰ)によりて表はされるであらう。勿論この場合貯蓄貨幣によりて購はるべき固定資本と従つてその生産過程は豫めかゝるものとして決定せられるのではなく、新投資の行はれた結果として溯行的に決定せられるものであつて、固定資本の生産より生ずる所得についても同様なことが言ひうるわけである。従つて固定資本の生産過程は全體の生産過程から豫め具體的に獨立してゐるものではないと言はなければならぬが、唯一時點について見て、並行して行はれる貯蓄と新投資によりて決定せられる固定資本とまたそれから生ずる所得と貯蓄せられた消費財とが夫々對應すべき關係にあると言ひうるであらう。しかしこれら二つの對應關係が互に均衡を保つ場合に全體としての均衡が保たれるのであつて、この關係を支配する要因として資本形成過程に於ける貯蓄と投資との關係が考へられるわけである。最近の貨幣理論が動態理論への手懸りとして取上げたものはこの點に他ならないわけである。

以上の如く見るときはヘンディクセンの造出論に於ける貨幣の循環過程の分析は既に最近の貨幣理論の中心問題たる資本の形成に於ける循環過程を含むものであるが、單にそのみでなくかゝる資本の形成の背後に於て行はれる貨幣の循環過程——消費財と新投資財との全生産過程を媒介する貨幣の循環過程を明かにし、更にこの過程に於ける經營資本の置換としての所得の實際上の成立過程を明かならしめるものと言ひうる。而してこのことは貯蓄と投資との關係の有つ意味を生産過程を媒介するところの貨幣の總循環過程の有機的關係の中に於て明かならしめるものであつて、それはこの關係を中心とする最近の貨幣理論の正當な理解と評價との基礎を與へると同時に、一般に動態理論としての貨幣理論の出發すべき地盤をなすものと言はなければならぬであらう。

上に述べた如き諸要素の間の對應關係は貨幣の循環過程の一般的な方向を示すに過ぎぬことは言ふまでもないところであつて、この對應關係に於ける量的關係は貨幣の循環の仕方、量的變動を支配するものであり、價格關係に於ける變動と、從つてこれを通して行はれる生産の變動はこの關係から説明せられうるであらう。最近の貨幣理論はかゝる關係を通して生産に對する刺戟とその變動の方向とを説かんとするものに他ならない。ベンディクセンの典型的造出論の主張の反面をなすところの、貨幣の造出は資本形成と關聯せしめらるべからずと言ふことは、かゝる對應關係に於ける諸要素の適合關係を貨幣造出によりて破ることなき原則をこゝに求めんとしたものであつて、それは既に述べた如く銀行をして商品手形の割引による信用業務以外には單に貯蓄貨幣の媒介のみを司らしめることによつて、貯蓄と投資とを適合せしめんとしたものと云ふことが出来る。從つてこの意味に於ては貯蓄と投資とを一致せしめることによつて安定乃至均衡を保ちうべしとする「貨幣論」に於けるケインズの主張乃至ハイエクの中立貨幣理論の主張と共通するものがあると言ひうるであらう。固よりこの場合刻々に並行して行はれる貯蓄と投資とを適合せしむるために銀行の積極的に活動すべき餘地の存することはケインズの指摘するところの如くであらうが、貯蓄と投資との一致する場合に生産が如何なる内容を以て行はれるか、或はハイエクの考ふる如く貨幣量は常に不變であるかはこの對應關係のみを以てしては明かにせられ得ないであらう。かゝる對應關係そのものは生産に應ずる貨幣造出の結果の部分的なる關係の表はれに過ぎないのであつて、この間に於ける均等乃至一致は生産の全量に於ける變化と兩立しうるからである。ケインズに於ける貯蓄と投資との均等が瞬間的なる面に於けるものであり、從つて全生産量の變化を反映すべき經常產出量の變化に伴ひうるものであることは想像しうるころであるが、それはこの全產出量或は經常

産出量の變化を媒介すべき貨幣造出の既に合理的に行はれてゐることを前提するものでなくてはならない。更にかゝる全生産を媒介するところの貨幣造出の過程を顧みることとはまたハイエクの貯蓄と投資との均衡が貨幣量の不變を意味すると解する考方に對する批判の基礎を與へるものであつて、それはかゝる貯蓄と投資との均衡と並行して、全生産の變化に伴ふ貨幣造出の變化と、從つて所得の變化との存在しうべきことを示すものが出来るであらう。唯この場合生産に應ずる貨幣造出に對して常に自然的價格形成の前提せられてゐるところに問題のありうべきことは既に一言したところであるが、これらの點については造出理論と價格決定理論との關係として後段に更めて論ずるところとする。

## 七 典型的造出論に對するエルスタアの批判

——貨幣本質觀と造出理論との內面的關係の問題——

ベンディクセンの典型的貨幣造出論の構造は大凡そ以上述べた如きものであるが、然らばそれは如何に性格づけらるべきであらうか。吾々はこれを最近貨幣理論の視角の下で考へようとするものであるが、しかしその前に豫想せらるべき疑問を代表するものとして、殊に內在的批判を試みたものとしてエルスタアの批判を顧みて置き度いと思ふ。

エルスタアがベンディクセンの貨幣學說のよき理解者であり、後繼者であることは既によく知られてゐるところである。唯ベンディクセンに於ける如き敘述の素直さと迫力とを感ずることは出来ないが、しかしその直觀的に捉へられたものを理論づけ、その思想的背景たる歴史學派殊にその發展段階說と有機的社會觀との影響を明かにしてゐる點

に於て吾々の理解を助けるものゝ多いことは否定しえない。このことが殊にその「經濟の流れ」第二部に於て著しいことについては嘗て述べたところである。このやうに貨幣觀乃至貨幣經濟觀に於てベンディクセンの思想を受繼ぎ、これを發展せしめたエルスタアは、しかし貨幣造出論に就ては一個の註釋者たるに止まり、むしろ批判的であつたと言はなければならぬ。上來述べ來つた如き造出理論は必ずしもよき繼りを以て述べられたものではなくして、「貨幣の本質」に述べられてゐる骨子的なものと「貨幣と資本」に收められた諸論文とを織り交せることによつて理解せられたものであつて、この理解については尠からずエルスタアの註釋に負ふものであつた。しかしエルスタアは結局造出論については殆んど發展せしめるところがなく、批判的立場に終つてゐると言はなければならぬ。「貨幣の魂」の發展と見られる「經濟の流れ」第二部に於ては造出理論は取扱はれてゐないために、彼のこの問題に對するその後の發展を知ることとは出來ないが、尠くとも「貨幣の魂」に於てはこの範圍を出でゐない。しかしそれではエルスタアは典型的造出論を何のやうに理解し、批判したか。それは典型的造出論に對する極めて少い批判の一つとして、殊にその内在的批判として顧みて置く必要があるであらう。

典型的造出論に對するエルスタアの批判の主なるものは凡そ三つの點に要約せられうる。第一はそれが思想上の可能性を示すに過ぎないと言ふ典型的造出論の性格そのものに關するものであり、第二は「貨幣と商品との平行關係」の原則とその實現方法との關係についての解釋に關するものであり、第三は「平行關係」の原則と關聯して考へらるる要求權の對象となるべき「社會的生產物」の具體的内容に對する解釋に關するものである。この最後の點は貨幣概念の具體的規定に關はるものであり、從つてベンディクセンの全體系の構造に關する内面的問題に關はるものである。

典型的造出論に對する總括的な批判として、エルスタアはそれは理論としては從來の理論と比較して革新的であるが實際としては現在一般に行はれてゐる慣行に比して進化的であるに過ぎないと考へる<sup>(2)</sup>。その意味は金本位制度のメカニズムに頼らんとした從來の造出論に對して、全く異なる貨幣觀から出發して新たな造出原則を導き出したと言ふ意味に於て革新的であるが、事實に於ては大戦前の獨逸帝國銀行に於て久しく實行せられ來つた商品手形の割引による通貨供給の慣行を理論的に基礎づけたものに他ならない意味に於て、何等新しき造出原則を提案したものではないと言ふことである。しかしこのことはベンディクセン自身の認めたところであるのみならず、自ら課した問題に答へた結果に他ならないことは既に述べた如くである。しかしエルスタアはまた他方でベンディクセンの言ふ如き典型的貨幣造出は一つの思想上の可能性を示すに過ぎぬものであつて、その實現には經濟組織の改變を必要とするものであり、貨幣は本來奉仕すべきものと言ふ立場からすれば、この理想實現のための改變は貨幣のかゝる目的並に本質に反するものであると考へる<sup>(3)</sup>。エルスタアの謂ふ經濟組織の改變なるものが如何なる内容を以て考へられてゐるかは知りえないが、典型的造出が凡ての生産者並に商人間に於ける支拂が商品手形によりて行はれることを前提とするところから、それが現實に於て完全に實現し得ないであらうことは否み難いところであるが、しかし典型的造出論の説かれた理由はその實踐的意味としては上に述べた如く帝國銀行の慣行として實行しつゝある造出方法の有つ意味を理論的に基礎づけることにあつたのであり、その理論的意味としても、その貨幣本質觀を基礎とする「典型的」造出を通して貨幣の流れと財貨の流れとの平行する典型的なる世界を描き出すことによつて、然らざる場合に何故に貨幣を媒介とする財貨の循環が攪亂せらるゝかを考ふべき基礎を示したものと言ふことが出来る。尠くともこの後の點は最近の貨

幣理論の出發點として最初に要求せらるべき分析であると言はなければならぬ。この意味に於て既に貨幣經濟概念の構成に於て典型的なる場合を想定することによつてその經濟形式としての意味を明かならしめると言ふ方法をとつたエルスタアが、同じ方法によつて打出された典型的造出理論の方法的意味を理解しなかつたことはむしろ不可解と言はなければならぬ。或は經濟組織の改變なるものが、例へば價格が自由競争以外の原理によつて決定せらるゝ計畫經濟の如きものを意味するとすれば、既に價格の決定を前提とする典型的造出理論はこの改變に應ずる造出原則を豫め呈示するものと言ふべきであつて、この點については後に更めて論及することとする。

批判の第二の點は所謂「平行關係」の原則に基く貨幣造出の具體的な原則がベンディクセンに於ては極めて不明確であり、積極的な形を以て述べられてゐないと言ふことに關するものである。この非難の内容は一つは「平行關係」の原則よりすれば、具體的には凡ゆる商品生産の各々と共に貨幣の造出を要求すると言ふ原則が打樹てらるべきであるにも拘らず、ベンディクセンの此の原則より導き出した具體的歸結が帝國銀行は商品の生産せられざるときは貨幣を造出すべからずと言ふこと、乃至は融通手形の割引によりて貨幣を造出すべからずと言ふ如き言はゞ消極的な表現を有つ原則として表はされてゐることに對するものであり、他は商品生産と貨幣造出との「平行關係」の原則を主張するにも拘らず生産者の發行する手形のみを基礎とする貨幣造出を要求せずして、商人の發行する商品手形を基礎とする造出をも均しく認めてゐると言ふことに對するものである。<sup>(4)</sup>しかし「平行關係」の原則を實現すべき具體的原則が上の如き消極的の原則として表はされてゐることは、帝國銀行の守るべき規範を反面より表はすと共に、むしろ造出上の危險を防止すると言ふ意味に於て現實に即する表はし方をとつたものに他ならないのであつて、積極的一般的

原則として、生産の各々と共に貨幣の造出せらるべきことを考へてゐたことは言ふまでもないと言はなければならぬ。唯問題はむしろ前述の如く現實に於て凡ての生産の各々と共に商品手形の發行による支拂の行はれざる場合に、この原則との間の間隙が如何にして充たさるべきか、またそれが現實に如何なる方法によつて充たされつゝあるかの説明が缺けてゐる點にあるのであつて、この點は現實の問題として説明を必要とする一つの問題と言ひうるであらう。<sup>(5)</sup> 典型的貨幣の造出が生産者の發行する手形のみならず商人の發行する手形についても認められてゐることは、一見この原則の原則性を弛緩せしめるかの如くであるが、「平行關係」の原則を商品の市場に現はれると共に貨幣造出の行はるゝ意味に理解し、或はこれを嚴密に消費財と實體貨幣（銀行券）との對應關係として見る場合に於ても、この對應關係が商人の發行する手形をも含めて、凡ゆる商品手形を礎とする造出と還流との相殺による綜合的結果として成立するところからすれば、商人の發行する手形をも造出基礎として認むることは、その勤勞給付による價值増加とこれに對する要求權の増加とを對應せしむる意味に於て、むしろ當然の擴張であり、何等この原則に反するものではないと考へらるべきことは既に述べた如くである。問題はむしろ流通過程にある凡ゆる商品を要求權の對象として理解するか否か、従つて商品手形の割引によりて造出せらるゝ帳簿貨幣をも貨幣と認むるか否かと言ふ貨幣本質觀と造出論との内面的關係にあるのであつて、この點はエルスタアの所謂「社會的生產物」の概念の具體的内容の解釋に關するものであり、批判の第三の點をなすものに他ならない。

(1) 前掲拙稿「分配機構としての貨幣經濟觀」参照。

(2) Elistier, Seel. a. n. O. S. 271-2.

(3) Elster, Seale. a. a. O. S. 307-8.

(4) Elster, Seale. a. a. O. S. 303-5.

(5) 生産者並に商人間の流通を媒介すべき貨幣造出の方法としてスマイスが既に商業手形の割引による造出を提唱したことは既に述べたところであるが、スマイスは更にこれと併せて當時スコットランドに行はれたキャッシュ・アツカウントによる貸付の必要なることを述べてゐる。それは商人が割引に附すべき手形を有せず、従つて商品流通と手形割引による貨幣造出との間に實際上或る間隙の存することを認め、これを補ふものとして考へたものであつて、上に述べた如き問題の所在とこれに對する一つの暗示を與へるものとして注目せらるべきものであらう (Smith, Wealth. op. cit. p. 288)。尙この點については前掲拙稿「金屬貨幣制度と自由主義經濟」一三二—三頁參照。

エルスタアの批判の中最も問題なる點は、ベンディクセンが貨幣は消費財のみに對する指圖證であるとしたことと典型的造出論との内面的關係に對するものである。要求權乃至指圖證としての貨幣の對象となるものはベンディクセンの表現に従へば「賣るに熟したる消費しうる生産物」或は單に「消費しうる財」であるが、かゝる要求權の對象たるものを一般にエルスタアの如く「社會的生產物」と呼ぶならば、「社會的生產物」の内容は直ちに貨幣の本質を具體的に規定することとなると同時に、「貨幣と商品との平行關係」に基礎を置く造出理論の内容をも規定することとなるべきであり、こゝに「社會的生產物」の概念を媒介として本質論と造出論との内面的關係が問題となるわけである。

ベンディクセンが貨幣の本質をその表はす要求權の對象と照し合はせて「貨幣はその經濟的本質に従へば消費財に對する指圖證であつて、資本財に對するものではない」と考へたことは既に述べた如くである。それは極めて明瞭な

表現であつて疑點を存しないものであるが、かゝる貨幣と消費財との對應關係に對して、商品手形の割引による通貨の供給をその實現方法とする典型的造出論は如何なる關係に立つであらうか。既に述べた如く「社會的生産物」に對する要求權たる貨幣の獲得の基礎をなす「給付」が生産物の新なる増加分として實現せらるゝ如きものとして解せられるときは、この「給付」に對して獲得せらるゝ貨幣は社會全體として見れば所得を構成するものであり、それは商品手形の割引による通貨供給とそれによつて返濟せらるゝ還流との差額として成立するものであつて、主として實體貨幣（銀行券）の形をとつて現實に流通界に放出せられるものである。従つて貨幣の造出なるものをかゝる生産物の増加分として實現せられる如き「給付」に對して行はれるものと見るならば、これに對應する指圖の對象となるものはかゝる増加分の結局に於ける現はれであり集計であるところの消費財乃至純生産物（新投資財を含む）であると言ひうるのであつて、指圖證たる貨幣の對象としての「社會的生産物」がベンディクセンによつて「消費財」と考へられたことは當然であり、またこの限りに於て前後一貫せるものと言はなければならぬ。しかしながらかゝる貨幣の成立過程を見るならば、結局に於て實體貨幣の形をとり所得として成立するかゝる貨幣の造出は、實際上は商品手形の割引によりに行はれるものであつて、かゝる貨幣を除く殘餘の造出は貨幣のそれではないであらうかの問題が生ずるであらう。この問題はこれを反面より見れば、社會に存在し流通する凡ゆる財貨、殊に生産財は「社會的生産物」として、即ち要求權の對象として考へられないものであるか否かの問題に他ならない。かゝる意味から、エルスタアは「社會的生産物」を一層廣く消費財の他に一般に生産財並に勤勞給付をも含むものであり、貨幣はかゝる意味に於ける社會的生産物に對する要求權——エルスタアの表現を以てすれば「参加手段」であると解するのであつて、こゝ

に兩者の貨幣概念の具體的内容に於ける相異と、従つて貨幣造出なるものゝ意味に關する考方の相異が見られるわけである。

エルスタアの「社會的生産物」なる用語の沿源をなしたシムムベーターに於ては、「社會的生産物」なるものは必ずしも常に同じ内容を以て考へられてはゐないが、尠くとも「貨幣理論の基礎方程式」に於ては消費財と個人的慾望満足のための勤勞給付とを含む「享樂財」として規定せられて居り、それは經濟の循環的構造の視角乃至歸屬理論の反面としての生産費原則の視角より見たる結果として考へられたものに他ならない。貨幣の價値を以て消費財に對する購買力であり、消費標準を以てこれを測らんとするケインズの考方は、シムムベーターの如く經濟の循環構造的な理解、乃至一般均衡理論的理解に基礎を置くものではなく、むしろその厚生經濟學的思想背景に基くものであらうが、均しく消費財を以て貨幣の對象と考ふる點に於ては一脈の相通するものがあると云ひうると共に、貨幣を以て消費財に對するものと考ふることには、ベンディクセンに於てもケインズに於ても斯く考ふべき要求が既に内面的に存在せることを感ぜしめるものがある。これに對してエルスタアの貨幣を以て廣く生産財に對する指圖證であると考へんとすることは、むしろ貨幣なる形式の無特定のなる指圖證なること、言ひ換ふれば所得としての貨幣と資本としての貨幣或は貨幣形式に於ける資本との形式上同一なることから、その造出過程に於てこの兩者の區別し得ざることがその根據となつてゐるものと想像せられる。このことは或は概念的なるものとしての貨幣が、消費財たると生産財たるとを問はず、むしろかゝる異なる系列に屬する財貨を媒介してその價値關係を同一形式を以て表現する形式として考へられるところにも見うるであらう。<sup>(3)</sup>しかし、具體的なるものとしての貨幣が生産財に對する指圖證たりうると言ふこと

は所得の具體的形式として成立したる貨幣が貯蓄貨幣となり投資せられたる場合に就ては明かなことであるが、商品手形の割引によりて造出せられたるものは、その循環過程として見るときは、既に取引せられたる財貨に對する支拂手段として作用するものであつて、その一部の所得として成立したるものが指圖證として作用するに過ぎないであらう。唯その何れが事後的な支拂手段として作用するか、また何れが消費財に對する要求權として作用し、何れが生産財に對する指圖證として作用するかは、その形式としては區別し得ず、單に結果として判斷せられるに止まるのであつて、このことは所謂典型的造出によらずして、融通手形の割引によりて造出せられる貨幣も亦その形式上から均しく指圖證たりうべきことから認められるところである。上述の貯蓄せられたる貨幣が生産財に對する指圖證となる場合には、他方に於てその生産財の生産より成立する所得貨幣が、貯蓄によりてその指圖の對象となることから解放せられたる消費財に對する指圖證として作用することによりて、貨幣と消費財との對應關係は更めて成立することゝなるわけである。従つてその意味からすれば貨幣の意味を何れに解するかは別として、その對應關係としては夫々理論的統一は保ちうるものと言ひうるであらう。問題はむしろこの形式の同一なる故に消費財に對する指圖證として成立したる貨幣と、生産財に對する支拂手段として成立したる貨幣とが、その循環過程に於てその作用場面の變更せられうること、或は「力場」の變化しうることにあるのであつて、これを典型的ならざる造出の場合について見るならば、それが貨幣經濟に特有の動態乃至攪亂現象の起る原因をなす點にあると言ひうるのであつて、典型的造出の假定の下に於ける貨幣の循環過程の分析は、かゝる動態乃至攪亂の原因を明かにすべき基本を示すものと言ひうるであらう。

要求權としての貨幣の對象の具體的内容の問題として更に勤勞を含むか否かの問題が提出せられてゐることは既に述べた如くである。この問題も以上の如き見方からすれば重要な問題を構成しないかの如くであるが、それは貨幣の循環過程の分析の一部分をなすものとして見る事が出来るであらう。既に述べた如くエルスタア並にシユムペーアに於ては、個人的勤勞も「社會的生産物」の内容をなすものであり、要求權の對象をなすものであつて、これに對する貨幣の支拂は要求權の實行と解せられるものであるが、ベンディクセンはこれを要求權の對象と解せず、従つてこれに對する支拂は消費財に對する要求權の讓渡であると解する。<sup>(4)</sup>ベンディクセンが以上の如く解する理由は生産物の形に於ける増加分と、この純増加分への寄與を基礎として獲得せられたる貨幣とを對應關係に於て見んとすること、並にその造出過程に即して見ることに基くものであつて、個人的慾望満足のための勤勞は生産物の形を以て實現せられず、従つて造出の基礎とならず、またそれによつて要求權の總額は増加しないからである。而してこれを結果より見るときは、勤勞に對する貨幣の支拂はこれに應ずる消費財に對する要求權を一應放棄するものであるが、しかし消費財は結局に於て要求せられるのであつて、勤勞給付はこれに代はるものはないからである。勤勞の給付とこれに對する支拂とによつて要求權の總額が増加せず、またその支拂が新なる造出によるものでないことからすれば、この點については一應ベンディクセンの説明を以て内面的統一あるものと言ひうるであらう。

唯以上の如き問題を検討することの意味はむしろかゝる詮索を通して貨幣の循環過程を明かならしめることにあるのであつて、この場合重要なことは貨幣の對象としての「社會的生産物」を單に全體としての範圍として考ふことではなくして、かゝる全體を一定の構造を有つ財貨世界として考へることではなくてはならない。蓋しこれによつて一定

の秩序による財貨の循環を考へうると同時に、これに應ずる貨幣の循環を考へうるからである。以上に述べたところはこの意味に於て典型的造出論並にそれを繞ぐる問題を通して「社會的生産物」の概念乃至貨幣の對象としての財貨世界の構造を描く一つの手段に他ならない。

(1) エルスタアはこれを嚴密には「共同經濟的財貨分配過程中にある、凡ゆる種類の物的財貨及び給付の全體」と規定し (Deele, a. a. O. S. 98-)、後にはこれを「給付基本」Leistungsfonds と呼んでゐる (Vom Strome. II. S. 39.)。

(2) シュムペーターは享樂財を指圖の對象としての「社會的生産物」と解する一方、別に「その他の具體的な社會的生産物」としての生産財の市場なるものと考へ、それについても享樂財についてと同様な方程式の成立しうることを考へてゐる (Das Sozialprodukt und die Rechenpläne.-Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik. 44. Bd. S. 675.)。

(3) 杉村廣藏「經濟哲學の基本問題」二二六頁以下参照。

(4) Bendixen, Geld u. Kapital. a. a. O. S. 69-70.

## 八 典型的造出論に於ける「自然的價格形成」の前提

—— 價格水準決定理論との關聯に於ける造出理論の性格 ——

エルスタアの批判に關聯して以上述べたところは要するに既に述べた如き典型的造出によりて描かれる貨幣の循環過程の分析を補ふものであり、批判の角度としては典型的造出論の内在的問題に關するものであつた。然らば典型的造出論はこれをもそのものとして見るときその性格は如何に解せらるべきであらうか。この問題はそれが「自然的價格

形成」を前提することに關はらしめて考へられるものであるが、今その意味を最近の貨幣理論の動向と比較することによつて考へて見たいと思ふ。

ベンディクセンが典型的貨幣を規定して「價值不動の貨幣」であり、それは「凡ゆる價格の平均」の不變を必ずしも意味しないとしたことは既に述べたところの如くである。而してこのことは更に「價格の平均の變動」をも、また「價格相互の變動」をも妨げるものではなく、一般に貨幣の側から「自然的な價格形成」或は「正しき價格形成」を妨げぬ如き貨幣の状態であると説明してゐることも既に述べたところである。「平行關係」の原則と商品手形の割引による貨幣造出とは要するにかゝる意味に於ける典型的貨幣造出の原則であり、實現方法に他ならないのであつて、問題は典型的貨幣をこのやうに規定することが果して何のやうに性格づけらるべきかと言ふことにあるであらう。

既に「價值不動の貨幣」と言ふことが貨幣の價值の不變を、従つて平均物價の不變を意味しないことが明かにせられてゐる點から、典型的貨幣が所謂物價を安定せしめる貨幣を意味しないことは言ふまでもない。このことは從來政策的意味のみから考へられて來た物價安定貨幣に對して何等か理論的意味を内包するかに思はせるものがあると言ひうるが、かゝる理論的意味を思はせる所以は、それが「價格の平均の變動」並に「價格相互の變動」と相容れぬものではないと言ふことであつて、このことは實は「自然的な價格形成」若くは「正しき價格形成」を貨幣の側から妨げぬと言ふことに他ならない。商品手形の割引によつて貨幣を造出すると言ふことは、取引がそれによつて行はれたところの價格を前提し、この價格に於て行はれたる取引に應じて貨幣を造出すると言ふことであつて、この點に於てはそれは事實の解釋としての所謂「銀行主義」の原則を貨幣造出の規範として見るものに他ならない。典型的造出論が

「銀行主義」の獨逸に於ける新版と言はれる理由もこの點にあるわけであるが、このやうな「銀行主義」的造出が果してベンディクセンの想定せる如く常に「自然的價格形成」を妨げぬ貨幣と一致するか否かに問題があると言はなければならぬ。しかしベンディクセンに於ても、またエルスタアに於ても價格の意味は解かれても、價格の決定機構乃至構成について何等述べられるところがないのであつて、同様に「自然的價格形成」なるものについても、單にそれが前提せられるに止まつてゐると言はなければならぬ。この點が經濟現象の形式的意味を明かにする上に甚だ勝れた成果を擧げながら、經濟世界の量的把握と言ふ點から見ても一般にこの學説が甚だしく缺くるものゝあることを示すと同時に、典型的造出論の理論的構造に於ける重要な缺陷であり、それが一つの造出技術論として見られ易い理由をなすものである。

このやうに「自然的價格形成」一般に價格の決定を前提とすることが典型的造出論の一個の造出論に終るべき性格を示してゐると言はなければならぬが、しかし「自然的價格形成」の意味について何等考へられるところがないわけではないのであつて、それは貨幣の側からの影響なき場合に成立する價格であり、「價格相互の變動」をも「價格の平均的變動」をも含みうるものとして考へられるものである。唯かゝる意味を以て前提せられたる「自然的價格形成」が如何にして妨げられることなく成立しうるかに問題があるわけである。かゝる角度から自然的乃至均衡的價格形成の貨幣的條件を尋ねんとすることが最近の貨幣理論の課題の一つであつて、即ちハイエクの中立貨幣論は「價格相互」の關係に於ける自然的價格形成の條件を求め、ケインズの統制通貨論は「價格水準」の生産費への一致の條件を示さんとするものに他ならない。

價格相互の關係が貨幣の側から影響せられざる場合とは、財貨自體に即して生ずる事情から決定せられる財貨相互の關係たる交換價值關係がそのまま貨幣的表現としての價格の關係に表はされる場合に他ならないのであつて、ベンディクセンの所謂「自然的價格形成」の内容の一面をなすものである。かゝる價格關係を貨幣の側より變化せしめぬと言ふ要求は、形式的には所謂貨幣の中立性の要求と正に一致するものと言ひうるのであつて、中立貨幣思想の近代的代表者たるハイエクもまた貨幣が財貨の相對的價值に影響せざる状態と言ふことを以て貨幣の中立性なるものを規定してゐる。<sup>(2)</sup>この意味に於ては吾々は典型的造出論は中立貨幣の要求を含むものであり、商品手形の割引による貨幣の造出はそのための造出方法を示すものと言ひうるであらう。唯しかしながら典型的造出論と中立貨幣論とは異なる角度から問題を見てゐることは注意せられなくてはならない。即ち典型的造出論にあつては既にかゝる自然的價格關係の成立せることを前提として、これを攪亂せしめざる如き貨幣造出の原則を考ふるものであるに對して、中立貨幣論にあつては現實の價格關係がかゝる想定上の價格關係に一致する如き貨幣の供給乃至循環の條件を求めんとすることである。このやうに自然的な價格關係の成立を前提とすると、その成立の條件を求めるとの相異は、實は問題となる貨幣供給の行はれる場を何處に見るかの相異として見られるのであつて、即ち典型的造出論に於ては問題を單に企業間に於ける財貨の流通を媒介するものとしての貨幣の造出に限つて見て、資本の形成に於ける通貨の供給は既に述べた如くこれとは全然別個の、かゝる造出によりて成立する所得の要求權の實行過程に於ける配分の問題であると解して、これを造出の問題の外にあるものと考へるのであるが、中立貨幣論に於てはこれとは反對にかゝる所得の配分過程と、この過程に於ける銀行の資本供給の問題であると解する。蓋しかゝる所得の消費支出と貯蓄とへの配分と銀行

による資本の供給とは、典型的造出論に於てその成立の前提せらるゝ個々の價格とその相對的關係とを決定すると考へられるからであるが、生産財價格の相對的關係を決定する貨幣資本の配分を利潤率の平均化によつて考へうるとすれば、全體としての消費財價格と生産財價格との關係に對する貨幣の中立性の條件は貯蓄と銀行の資本供給を含む投資との均等の中に見出されると考へられるからである。

以上の如く均しく價格相互の關係としての自然的價格形成を妨げざる如き貨幣供給の條件を求めながら、その條件の所在について以上の如く見方を異にする理由は、一つはその成立過程にこれを求め、他はその成立後にこれを求めるところから來るものゝ如くであるが、その求められた條件は實は相互に他を前提し、これを含むものでなくてはならない。ベンディクセンが典型的造出を以て「自然的價格形成」を妨げざる貨幣造出と考へたことはこの意味に他ならない。投資と貯蓄との均等によりて成立する價格關係は、それが亂さるゝことなきためには、その價格をそのまま受取り、その價格に於て財貨の流通を媒介する貨幣の供給の行はるゝことを必要とするのであつて、このためには典型的造出論に於て説かるゝ如き貨幣造出方法が前提せられなければならぬであらうし、<sup>(3)</sup>又他方この方法による貨幣造出が既に成立せる價格關係に影響せざることを以て典型的造出たりうるためには、これと並行して既に自然的價格を成立せしむる如き資本形成過程に於ける投資と貯蓄との一致が前提せられなくてはならないのであつて、このことはベンディクセンも明かに前提せることは既に述べた如くである。更に典型的造出の消極的原則として銀行は融通手形の割引によりて貨幣を造出すべからずと考へられたことは、かゝる造出によりて資本形成過程に於て價格の變動の生ぜざるための原則に他ならないのであつて、この意味からすればこれら異なる角度から求められた二つの條件は單に分

離して求められたに止まり、實は同一の過程に於て相互に連絡するものと言はなければならないが、この點については後段更めて述べることにする。

典型的造出論の「自然的價格形成」を前提とすることの今一つの内容は貨幣價格の高さに關係するものである。既に成立せる價格を前提し、この價格を造出過程に於て變動せしめざるが如き貨幣の造出と言ふことが典型的造出論の趣旨であるとすれば、この價格が如何なる事情によりて如何なる高さに決定せらるゝかは本來問題の外に置かるべき事柄であり、技術的意味に於ける典型的造出はこれとは無關係に常に主張せらるべき筈のものである。然しこの場合に於ても「自然的價格形成」を前提とすることは、全體としての貨幣の循環に於ける均衡を考ふるものとも言ふことが出来るが、しかしそれは單に想定せらるゝに止まつて、かゝる「自然的價格形成」の條件を明かにしてゐないことは既に述べた如くである。而してかゝる「自然的價格形成」の一面たる價格關係に於ける「自然的」乃至均衡的關係の條件が中立貨幣論の問題とするところであり、これによりて補はるべきものゝあることも既に述べた如くであるが、その他の一面たる貨幣價格の高さそのものを決定し、その「自然的」であるための條件を分析することは「貨幣論」に於けるケインズの試みんとしたところであつた。

典型的造出論に於て前提せらるゝ價格は本來個別的なる具體的價格であり、このことはその實行方法たる商品手形の割引に就て見るも明かなところであるが、「自然的價格」の内容として價格關係とは別に考へらるゝ價格の高さは貨幣を以て表はされたものであり、既に成立したるものとして考へらるゝ場合には、それはベンディクセンも言ふ如く「價格の平均」に於て考へられるものであらう。このことはフィッシアの交換方程式がその成立過程に於ては個々

の價格を以て、即ち  $MV = p^1q^1 + p^2q^2 + p^3q^3 + \dots + p^aq^a$  なる形を以て考へられながら、その成立したる後に於ては一般物價の形  $MV = PT$  を以て考へられると同様である。従つてこゝに價格の高さに於ける「自然的」なるものが考へられると言ふことは、言ひ換ふれば物價水準としてのそれが考へられると言ふことに他ならない。この意味に於てケインズの價格水準の方程式に於て價格水準の安定の條件として考へらるゝものは、前提せられたる「自然的價格形成」の條件の一面をなすものと言ふことが出来るであらう。唯ベンディクセンに於ては既に述べた如く「自然的價格形成」は「價格の平均的變動」と相容れぬものではないと考へられるのに對して、ケインズに於ては全體の價格水準  $E = \frac{E}{O} + \frac{I-S}{O}$  に於ける投資  $I$  と貯蓄  $S$  との均等は、一應價格水準の安定の條件として考へられるものであるが、しかし理論的にはそれは價格水準の生産費  $E$  に一致する條件であり、生産過程に於ける生産量  $O$  の變化によつて生産費の變化と共に變化することが考へられるのであつて、價格水準の貨幣を以て表はされたる生産費への一致と言ふ意味に於て、それは一般に「自然的價格形成」の條件を示すものと見ることが出来るであらう。

(1) 商品手形の割引による貨幣造出に對してはその造出額が豫め與へらるべきであり、その一の要素として價格が考へられるのであつて、この點についてベーレンスは、それに對して貨幣の造出せらるべき財貨の生産を數量的に確定すべき測度として價格が考へられなければならないと言ひてゐる (Behrens, W. G., Das Geldschöpfungsproblem. 1928, S. 201.)。しかし彼はこの問題を財貨の如何なる過程に於ける價格であるか、例へば生産者價格、卸賣價格又は小賣價格の何れであるかと言ふ問題と解してゐるのであつて、このことは彼が典型的造出論の眞意を理解せず、從來の通貨調節論に對すると同じ態度を以て臨んでゐることを示すものである。こゝで問題となることはそれが如何なる價格であるにせよ、價格の成立が前提せられてゐると言ふことそのことである。

(32) Hayek, F. A. v., *Prices and Production*. 1931. p. 27. 豊崎稔譯「價格と生産」六四—五頁。

(3) ハイエクの中立貨幣政策論の實踐的原則が貨幣量を不變に保つことにありと考へられてゐること、並にその結果として生産の迂回化と共に總所得の減少することは所得成立の過程たる造出過程に對する分析の不備に基くものであつて、以上に於て明かにした如き造出過程を見るならば、例令正比例的ではないにせよ生産の増加と共に所得の増加すべきことが考へられることは既に述べたところからしても明かなところであらう。中立貨幣論のみならず一般に最近の貨幣理論が貨幣造出過程の分析について典型的造出論に負ふべきものゝあると思はれるのはかゝる點に他ならない。

(4) Keynes, J. M., *A Treatise on Money*. 1929. Vol. I. pp. 166-. 鬼頭仁三郎譯「ケインズ貨幣論」第二分冊、六〇頁以下参照。

以上の如く見るときは典型的造出論に於て前提せられる價格の形成は、價格關係としてもまた價格水準としても投資と貯蓄との關係によりて決定せられるものとして最近の貨幣理論の中心課題をなすものであり、これら二つの要素の均等は「自然的價格形成」の條件として考へられるものであつて、ベンディクセンに於ては造出論とは別個の領域をなす資本形成の問題として考へられたものである。このやうに問題領域の關係として見られた兩つの考へ方は、之を連続するものとしての物價を媒介として見るとき、如何なる關係に於て考へらるべきであらうか。この問題は既に貨幣の供給量と物價との間に於ける因果關係の方向の問題として所謂「通貨主義」と「銀行主義」との間に於て争はれた問題に他ならないものであるが、こゝでは典型的造出論の性格を考ふる一つの方法としてその價格水準の決定理論との構想上の關係を考へて見るとする。<sup>(1)</sup>

最近の貨幣理論に於ける投資と貯蓄との關係を基礎とする動態理論は、一定の時點を出發點とする價格水準の變動

理論を中心とするものであつて、例へばケインズの前掲の方程式  $\pi = \frac{E}{O} + \frac{I-S}{O}$  に於ける  $\frac{E}{O}$  は生産費であると

同時にその出發點たる價格水準を示すものであり、従つて  $\pi = \frac{E}{O}$  によりて示さるゝ價格水準はその生産費への一致

を示すと共に、前期との比較に於ける價格水準の安定を示すものである。このやうに投資と貯蓄との關係、従つて

$\frac{I-S}{O}$  が正であるか負であるか乃至は零であるかは、價格水準の變動を説明する要素であるが、かゝる要素を含みそ

れによつて價格水準の變動を説明する方程式  $\pi = \frac{E}{O} + \frac{I-S}{O}$  は價格水準の決定を示すものであつて、かゝる價格水

準の決定と變動とを單一な貨幣數量なる要素に依て説明せんとしたものがフィッシアの交換方程式  $MV = PT$  により

て代表せらるゝ貨幣數量説に他ならない。かゝる關係によりて決定せらるゝ價格水準の安定が内面的に如何なる意味

を有つかを  $\pi = \frac{E}{O}$  によりて價格水準の生産費への一致として、従つて單なる安定ではなくして均衡の一つの形式と

して示すことがケインズ方程式の構造上の一つの特徴と言ふことが出来るであらう。このやうに投資と貯蓄との關係

を中心とする最近の貨幣理論は價格水準の單なる決定論乃至變動論ではなく、また單に安定の條件を示すものでもな

くして、安定の構造上の意味を示すものであり、これによりて均衡的な價格形成の條件を示さんとするものであつて、

この意味に於て一つの貨幣的なる「自然的價格形成」の條件を明かにせんとするものと言ひうるであらう。

典型的貨幣造出が經濟の全貨幣的構造に對して直ちに典型的たりうるためには、以上の如き貨幣の循環過程——ベ

ンディクセンの所謂資本の形成過程に於ける均衡が前提せられなければならないわけであつて、ベンディクセンも亦

かゝる意味に於ける「自然的價格形成」を前提したことは屢々述べた如くである。しかし典型的造出そのものとして

は、商品手形の割引による貨幣造出を以て考へらるゝ如く、既に成立せる價格に從つて造出せられ、唯それが商品の

生産と平行して行はれることを以て足ると考へられたと見られるのであるが、かゝる意味に於ける造出がそれによつて行はるべき價格の決定理論は造出理論そのものゝ内部には存せず、それは他から與へられたものを單に受取る立場にあるのであつて、これを決定する理論として貨幣數量説乃至上述の如き價格水準の決定理論が別に考へられなければならない。銀行主義がその主張の趣旨とは別に物價決定理論を認むることなくしては經濟社會の貨幣的機構の全體を描き得ない理由もこゝにあると言ひうる。

以上は典型的造出論に前提せらるべき價格の決定理論の典型的造出論に對する關係を見たものであるが、逆に典型的造出論は價格決定理論に對して如何なる意味を有つてあらうか。上に述べた如く數量説は貨幣數量なる要素による物價決定理論であつたのであるが、これによつて決定せらるゝ物價の高さ、従つてこれを決定するものとしての貨幣の數量については、單に安定と言ふこと以外には何等の規範的なものを示すものではなかつたと言はなければならぬのであるが、最近の貨幣理論に於ける投資と貯蓄との均等の要求は價格水準乃至價格關係の生産費乃至均衡價格に對する一致の條件を示す意味に於て、物價の構造を示すと同時に物價決定に對する規範的なものを示すものと言ひうるであらう。しかしながらかゝる條件の充たされた場合に成立する價格水準乃至價格關係を受取り、これを亂すことなくして財貨の流通を媒介するためには、財貨流通の言はゞ基本的領域——投資と貯蓄とを通じて行はれる貨幣の循環の變化は從來の財貨の循環を變化せしめることに關する領域に過ぎない——に對する媒介手段たる貨幣の供給が、この價格に應じて行はれなくてはならないであらう。商品手形の割引による造出はかゝる單に媒介的なものとしての貨幣を供給するものであつて、典型的造出は上述の物價決定に對する規範の實現を内容的に支へるものと言ひうる

であらう。而かもこのやうにして支へらるゝ價格の水準とそれに立脚して造出せらるゝ貨幣の量とは更に次の價格水準の決定に對して基準を與へるものであつて、貨幣の造出がこの規範から外れることは即ち受繼がれたる價格水準を變化せしめることに他ならない。ペンディクセンが資本形成と從つて價格の成立とを前提し、これに適合する貨幣造出の原則として商品手形割引によるべきことを主張する反面に於て、融通手形の割引による造出を否定したことはこの意味に他ならないのであつて、この原則の中には同時に投資と貯蓄との均等による資本形成が豫想せられてゐるものと言ふことが出来る。

資本の形成による價格水準の決定と價格水準を前提する貨幣造出との間に於ける關係は以上の如くして相互に連続する關係として考へられるのであつて、これを物價水準の決定より出發して見るときはその變動を通して見れば貯蓄と投資との關係によりて決定せられ、その決定せられたる價格水準を受けて滞りなく財貨の流通を媒介するためには典型的造出論の主張する如き造出方法のとられることを必要とするであらうし、かくして媒介せられたる價格水準が引續いて維持せられるためには更にこの條件の守られることが、言ひ換ふれば投資と貯蓄との均等の保たるゝことが必要とせられるのであつて、かくの如き價格の連續の中にあつて、典型的造出は受働的立場にあつてこれを媒介するための原則を示すものと言ふことが出来るであらう。従つて價格水準の決定について見れば典型的造出は資本形成による價格水準の決定に對して常に受働的立場にあるものであると言ひうるが、しかしこれを連續的なる循環に於ける規範的なものとして見るときは、價格の成立並に資本形成に於ける原則とこれを受繼ぐ貨幣造出の原則とは相互に補ひ他を含むことによつて始めて成立するものと言はなければならぬであらう。

(1) 本節以下に於ける問題の取上げ方は主として山口教授の通貨主義と銀行主義との構想の關係を論ずる取扱方(山口茂「流通經濟の貨幣的機構」第四章十、十一、十二)に負ふものであるが、こゝではその素材を試みに同一關係に立つ最近の貨幣理論に於ける價格水準の決定理論と典型的造出論にとつたものに他ならない。唯以下に於ける兩者の問題領域の比較は典型的造出論の性格を明かならしむるためであつて、従つて比較そのものとしては單なる素描に過ぎない。

(2) ケインズの基本方程式に於ける全體の產出高 $O$ が、消費財と新投資財とのみを含むものであり、従つて全産業的流通を含むものでないことはケインズ自身の敘述の中からも看取せられるところであるが(「貨幣論」第四編第十五章産業的流通と金融的流通參照)、このことを明瞭にしたものとして山口茂「流通經濟の貨幣的機構」四〇四頁、並に「物價とインフレーション」(新經濟學全集所收)(2)一五八頁に於ける基本方程式の圖式的説明がある。(尙この點については高橋正雄「ケインズ貨幣論の研究」に於ても問題とせられてゐるが、その解釋については疑問がある。)

貨幣理論の最近の動向に照して考へらるゝ典型的造出論に對する批判の今一つの角度はそれが金利の貨幣造出に於ける作用を考慮してゐないと言ふことである。商品手形の割引による造出については常にその條件として金利の考へらるべきことは言ふまでもないところであつて、この金利が何等から形に於て貨幣造出に影響し、その條件をなすと考へられなければならないであらう。商品手形の割引による貨幣の造出は既に成立したる價格と取引量とに對して行はれるものであつて、この意味からすれば受働的なるものと言はなければならぬが、かゝる取引の成立は資金の需要の充たさるべき條件と、これによりて得らるべき利潤に對する豫想とによつて決定せられるわけであつて、この資金の需要の充たさるべき條件は即ち金利に他ならない。従つて商品手形の割引による貨幣の造出は形式的には受働的

なるものと言ひうるとしても、その割引の行はるゝ條件たる金利を通して實は常に價格と取引量とに對して影響しつゝあると言はなければならない。最近の貨幣理論に於ける價格水準の決定理論が投資と貯蓄との關係を中心として發展しつゝある他面に於て、かゝる投資と貯蓄との關係を支配するものとして金利の作用を重視しつゝことはこの意味に他ならない。勿論この場合に考へらるゝ金利が資本形成過程に於ける長期的利子であり、商品手形の割引に於ける金利が短期的利子であると言ふ相異は見られるが、資本形成によりてその流通の左右せらるゝ財貨の價格が一般財貨の價格と共通に決定せらるゝものであり、また長期資金と短期資金との間に代替關係のあることよりして、兩者の間に何等かの内面的關聯と同形性とが豫想せられるであらう。<sup>(1)</sup> 尠くとも取引に對するかゝる金利の作用を認めうるとすれば、これを認めたる上に貨幣の造出が自然的價格形成を妨げざるために、言はゞ中立的なるがためには、この金利が既に「自然的價格形成」に對して中立的であり、その内部に矛盾なく吸收せらるゝ如きものでなくてはならない。かかる金利の高さに對する基準は金利自體の内部には求められないのであつて、かゝる金利の中立的なるための基準として「自然利子」概念を最初に導き入れんとしたものが即ちウィクセルであつたわけである。<sup>(2)</sup> 最近の貨幣理論に於てはかゝる自然利子に代るべき概念として例へば「均衡利子」(ハイエク)乃至「資本の限界能率」(ケインズ)の如きものが考へられてゐるわけであるが、その理論的要求に於てはウィクセルが自然利子によりて期待したものと共通するものと言ひうる。典型的造出論がこのやうな金利の作用とその「自然的價格形成」に於ける意味とについての考慮を缺いたことは、その理論構造上の大きな缺陷と言はなければならないが、今は唯この點を指摘するに止めて置く。

(1) その根據については明示せられないが、各種の金利の區別を理論上無視することは屢々意識的に行はれてゐるところであつ

て、例へばウイクセルに於ては割引率の一定の水準が継続的に保たるゝ場合には長期貸付に對する利子率に影響すべきことが考へられ居り (Wicksell, K., *Geldzins und Güterpreise*, 1898, S. 80. *Interest and Prices*, Tr. by R. F. Kahn, 1936, p. 89. 豊崎稔譯「金利と物價」一〇六頁、北野熊喜男、服部新一共譯「利子と物價」一三六頁)、ケインズは便宜のため單に利子率を以て各種の利子率の複合を意味せしめるものとしてゐる (Keynes, J. M., *The General Theory of Employment Interest and Money*, 1936, p. 167, foot note.) この關聯の尋ねらるべきことは言ふまでもないが、今は唯かゝる取扱の行はれてゐることを指摘するに止める。

(2) ウイクセルが自然利子概念を物價理論に取入れたことは自然利子概念の應用に於ける重大なる貢獻と言はなければならぬことは緒言にも述べたところであるが、彼はかゝる自然利子に一致する金利を以て物價に對して「中立的」なるものとして規定してゐるのであつて (前掲書第八章)、この思想はハイエックの中立貨幣論の一つの基礎をなすものである。

(3) Hayek, *Prices and Production*, op. cit. p. 20. 豊崎稔譯「價格と生産」五四頁。

(4) Keynes, *General Theory*, pp. 135—.

### 結言——經濟機構と典型的貨幣造出論

以上述べた如く「自然的價格形成」の條件と貨幣造出に於ける金利の作用とに對する分析を缺いたことは典型的造出論の最も重大なる缺陷であり、貨幣經濟の全機構を明かならしむるものとしては大きな空白を残すものと言はなければならぬであらう。しかしこれらの前提の成否を別としても、それは獨自に成立しうる一つの問題領域を示すものであり、殊にかゝる前提せられたる諸點をめぐる最近の貨幣理論の中心課題の外に、むしろそこにその解明の前提

せられつゝある問題領域のあることを示すものとしてその意味の没却せられ得ないものがあると思はれる。それはともあれ以上に試みた如き典型的造出論の解釋と批判とは現實の流通經濟機構に於ける貨幣の循環過程の基本的分析の手段としてこれを理解し、また同じ機構の分析理論としての角度より眺めたものであつて、總じて現實の機構に關はらしめて見た擴充的な解釋を目的とするものであつた。これを最近の貨幣理論との關聯に於て理解せんとしたこともこの理由に他ならない。従つて現實の貨幣の循環過程の基本的圖式をそこに解しようとすることは典型的造出論を新しき視角の下に評價せんとするものであつて、その本來の趣旨たる貨幣造出の規範を示すものとしての意味の外に出るものと言はなければならないが、典型的造出論の示す造出規範は既に「自然的價格」の成立後に於ける、これを亂さざるための造出方法を示すものであつて、これによつて貨幣の典型的循環圖式を描きうることは既に述べた如くである。しかし典型的造出論をそれ自體完了的な造出規範と見るときその意味は如何に理解せられうるであらうか。

貨幣を以て生産と消費とを媒介し、「社會的生産物」の分配手段と解することは、その經濟に奉仕するものとしての意味を示すものであり、更に財貨の生産と共に造出せられ、消費と共に消滅すべしと言ふ所謂「平行關係」の原則と、この原則を實現する方法として「自然的價格形成」を前提し、これに應ずる手形割引による貨幣造出を考へたこととは、奉仕するものとしての貨幣の精神によりて一貫せられたものと言ひうるであらう。エルスタアが典型的造出論を批評して、一つの思想上の可能性を示すに止まり、その實現のためには經濟組織の改變を必要とするであらうとしたこと、並にかゝる改變を必要とすることが本來奉仕するものとしての貨幣の本質に反するものとしたことについては既に述べた如くである、しかし貨幣の精神を以て財貨の世界に從屬的なるものであり、經濟に奉仕するものと

解する立場から見て改變せられたる經濟機構に於て最もよくその精神の實現せられうると考へることは、尠くともその意味を理解する立場に矛盾するものではないと言はなければならぬ。

現貨の經濟の下では貨幣は必ずしも奉仕する役割のみを勤むるものではなく、むしろ屢々物の世界を支配する立場に立ち經濟を指導する手段として作用せしめられつゝあることは言ふまでもない。このことは現在の經濟機構に於ける既に述べた如き價格決定に當つての貨幣の積極的作用の反面をなすものであつて、それを通して財貨の流通方向乃至使用方法の決定せらるゝ價格が貨幣の流れ乃至供給によりて決定せられることに基くものである。現在の段階に於ける統制經濟は、一方この財貨の流れを支配する機構としての價格の決定については貨幣の作用を排除しつゝ、他方この流れを媒介するものとしての貨幣についてはむしろ奉仕することを超えて支配する立場に立たしめんとする點にその問題を含むものと言はなければならぬ。經濟社會に於ける凡ゆる財貨の價格が市場機構による決定原理とは別個の原理を以て定められる機構、例へば計畫經濟の如き經濟機構の下に於ては、貨幣は價格——流通關係の表示手段として用ひらるゝに止まつてその決定には作用しないと同時に、財貨流通に對しても從屬的なものとして奉仕するところが要求せられるであらう。蓋しかゝる場合に於ては財貨の流通の方向乃至使用方法は既に價格——流通關係と共に計畫によつて決定せられ、貨幣に單にこれに従つて財貨の流通を現實に媒介することを以て足るからである。典型的造出の方法はかゝる單に媒介的なるものとしての貨幣造出の原則を暗示するものとも見うるのであつて、其處に前提せられた「自然的價格」は、この場合に於ては市場機構によるとは別個の原理によりて決定せらるゝ價格、例へば公正價格の如きものに當ると言ひうるであらう。唯かゝる造出による貨幣の循環と財貨世界との適合關係については、既

に述べた如き資本形成の計畫による適合性の外に、所得成立過程に於ける財貨價值の分配關係の適合性に關する規範の問題が更めて考へらるべきであらうことは言ふまでもない。典型的造出論によつてベンディクセンの期待したものが以上の如き現實の經濟機構と異なる機構の下に於ける貨幣造出原則を示すことにあつたのではなく、またかゝる適用を豫期したものでないことは言ふまでもないところであるが、尠くとも以上の如き問題に對する暗示を含むことは、それが現實の貨幣機構に於ける造出規範乃至その分析の基本的圖式を示すものとして以外に、現在の視角からする新なる意味の見出さるべき點であると思はれる。(昭和十五年一月十日)